

Web再録!

めぐぴよんの 育自の百花



飾らない言葉で書いた
48本のエッセイ集

はじめに

ようこそ「めぐびよんの育自の百花」へ

「めぐびよんの育自の百花」は、1999年2月から2003年4月まで続いたエッセイのホームページです。めぐびよんは、スタートした時、ぎりぎり三十代でした。

当時は、ひどいうつ病でしたが、もともと書くことが好きで、エッセイを書くことだけは、なぜかできていたのです。クリスチャンで、子どもが三人（当時は小学生から中学生の年齢でした）、家庭のことは育児も含めて夫の手伝いはなく、そのことがうつ病の原因だと言われました。

ホームページは病気の悪化で終わってしまい、そののち、データもわからなくなって、エッセイのプリントアウトだけが残りました。それも、どこに行ったかわからなくなっていました。今年（2015年）思わぬところから発見されました。全編（プリントアウトをしていたもの）120編、そのうち48編を今回、電子書籍にまとめました。

「私のエッセイを通じて、苦しい毎日の生活の中で、少しでも、元気や勇気を出してもらえたら」という精神は変わっていません。真面目な話もありますが、笑ってほしいというのが、一番の作者の願いです。

なお、「育自の百花」というタイトルは、子どもたちが小さいころ助けられた、故松田道雄先生の名著「育児の百科」から、勝手にいただいて付けました。この本には、実に多くの「例外」が紹介されていて、マニュアル育児にならずにやっていけたのはこの本のおかげだと思っています。感謝します。

以前に読んでいる方も、初めて読む方も、楽しんでいただければ幸いです。

2015年7月

50歳なかばのめぐびよん。

追記

「育自の百花」を終わった数年後、夫と離婚し、働きますが、病状が悪化し、今は家庭療養中です。子どもたちは、一人は他県に仕事で行き、後の二人と一緒に住んでいます。家事はほとんど子どもたちに任せています。子どもたちはみな二十代になりました。二人の希望で、不登校の話は控えさせていただきました。

目次

★★★もくじ★★★

はじめに ようこそ「めぐびよんの育自の百花」へ・・・1

第1章 育児は育自・・・3
育児の中で知ったことや、嬉しかったこと、小さかった子どもたちの楽しい話などです。

第2章 私の本棚 吉村達也・・・16
大好きだった推理作家吉村達也の本について語ります。単なる書評とは、一味違います。掲示板に吉村さんご本人が、何度か来てくださって驚きました。よい思い出になりました。

第3章 私の本棚 遠藤周作・・・28
中学校の時から読んでいて卒論も書いた遠藤周作の本について語っています。遠藤周作でした。長崎の外海町への旅の話もあります。

第4章 風の吹くまま・・・36
身の回りのこと、キリスト教のこと、などを語っています。難しいことは書いていないので、ご安心ください。どんなこともわかりやすくというのがめぐびよんの文筆精神です。

おわりに 「時は流れても、変わらぬものもある」・・・52

★育児は育自***生きてるだけで30点***

★育児は育自 ***生きてるだけで30点***

大学時代、ユニークな先生がいらっしゃいました。その先生の試験は、名前をちゃんと書いていけば、30点いただけるのです。「小学校一年生じゃあるまいし」とお思いでしょうが、これが大マジメ。(結構、ご高名な先生で、数年前100歳で天寿を全うされました)そして、及第点は60点ですから、あと30点取れば、その先生の講義の単位はいただけるわけです。

その頃は、ただ「ラッキー」と思っていたこの試験。今になってみると、何か大切なことを教えてくれた気がするんです。

そこにいて、名前を書けば30点。つまり、そこにいて、そこに生きているということが既に30点なんだということ、先生は教えてくださったのだと思うのです。

病気や障がいや、その他いろいろな事情で、他の人に助けてもらわないと生きていけない。そんな状態になっても(よく考えると、誰も一人では生きていけないんですが)そこにいて、生きていけば30点。どんなに周りに面倒や迷惑をかけても、決してマイナス点じゃない。マイナス点で必要ない人間なんていない。だって、生きて、それだけで大変なことでもね。

ユニークな先生の試験から、私は、そんなことを考えました。

どんなに苦しくても、辛くても、迷惑かけても、生きていけば30点。そして、及第点は60点。100点人間になろうと頑張るのは大変だけど、あと30点ぐらいなら「私にもなんとかなるかな」って気がしませんか

?ちょっと待てよ、30点だって、マイナスじゃないんだから、60点の及第点だって、取れなくても悲観しなくていいんじゃないかな・・・

子どもが小さくて大変だった頃、私はこの考えを自分に言い聞かせていました。私が生きていて、子どもを怒鳴ったり、叩いたりすることがあっても、とりあえず母親であることだけで30点。子どもがたとえ哺乳瓶を他の子より長く使っても、おむつが取れるのが遅くても、生きていけば30点。(だって、子どもを生かしておくだけでも、大変ですよ)生きてることが大事なんだ。あと30点ぐらいなら、ぼちぼちでもなんとかやってみようかなって思えたんです。

100点の母親、100点の父親、100点の教師、

100点の子ども、100点のクリスチャン・・・カッコいいかもしれないけど、世の名k100点満点だらけになったら、生き苦しい気がしませんか?非の打ち所のない人って、つまらない気がしませんか?

60点で、いいじゃないですか?

そういえば、以前、教会の礼拝説教で「強くなりなさいとよく言われるけど、神様は本当に強くなることをお望みなのだろうか」と聞いたことがあります。神様は、60点でも、それ以下でも、そのままOKで、現に今もこうして、私たちを生かしてくださってるじゃないですか。

そう、人生の試験では、名前を呼ばれ「はい、ここにいます」と答えれば、神様が30点くださるんじゃないでしょうか?

神様は「おい、その君」とか「メガネの女の人」なんて呼び方はなさらないんですって。一人一人の名前を覚えていてくださって、いつも、名前を呼んでくださるのだそうです。名前を呼ばれたら、どんなに惨めで、ダメな自分でも「はい、ここにいます」と応えて神様に30点もらいましょうよ。そして、あと30点、ぼちぼちと無理しないでがんばってみましょうよ。

えっ?自分勝手な解釈だって?こんな及第点スレスレの(もしかしたら落第かも?)の私の考え方で、落ち込んだ時なんかには、少しは元気の元にならないでしょうか・・・★★★

★育児は育自 ***雑草のように育て***

★育児は育自 ***雑草のように育て***

私は小さい頃から、あまり体の丈夫な方ではない。しかも、けっこ～図太いように見えて、神経の方も繊細だ。
(と思っているのは自分だけ?!)
小学校低学年の頃は、しょっちゅう泣くし、しょっちゅう保健室に行っているような弱い子だった。小三の時の担任の先生が、年賀状に「雑草のように、たくましく育てほしい」と書いてくださったのを、今もよく覚えている。

小四の時に転校をした。それ以来、何故か、ちょっと強気の子になった。「転校生」とからかわれる環境の中で、たくましくなったのかもしれない。

大人になって、結婚して、子どもを三人産んで、今や雑草も顔負けの根のおろし方！少々ではビクともしないおばちゃんになってしまった。(誰？おばあちゃんって言ったのは！)

ある時、当時幼稚園か小一くらいだった長女に「雑草のように、たくましく育て」と昔の自分のことを思いながら、話してやった。「雑草はね、土の少ないアスファルトの切れ目や狭いところからでも、たくましく伸びていくでしょ。そんな風にたくましく生きて、キレイな花を咲かせる雑草のようになって欲しいって、お母さんは思ってるんよ」少々自分の言葉に酔いながら、娘とこんな風に生き方を話すようになったことに、感動していた。そう、夕暮れ時だっけ……。

じっと真剣に私の顔を見て、話に聞き入っていた娘は、しばらく考えてから、口を開いて、こう言った。「大丈夫よ、お母さん。私、狭いところとかすりに抜けて歩いたりするの上手だもん！」

ああ、親の心子知らずとは、よく言ったもんだ。★★★

★育児は育自 ***博学な詩***

★育児は育自
博学な詩

小学校2年の次男が、学校で初めて「詩」を書いてきた。迷作です。よかったら、お読みください。

作品No1
「サザエ」
たかいがうまい。

作品No2
「とくがわいえやす」
天ぷらでした。

作品No3
「バカガイ」
バカなのか。

作品No4
「大5しょうぐん つなよし」（原文のまま）
かけになるな。

いかがでしょうか。学校では「短すぎる」と叱られたと言っていました。

本人曰く「僕の脳みそは50%がゲーム、49%が遊び、1%が勉強だから、これ以上長く書けない」とのことでした★★★

★育児は育自 ***「お姉さん大好き」***

★育児は育自 ***「お姉さん大好き」***

長男は、幼稚園に入った頃から少しずつ変わってきたが、それまでは、面食いの「お姉さん大好き幼児」だった。

ベビーカーに乗せて、喫茶店に入ると、くるりと後ろを向いて、いくら言っても、飲み物がきても、こっちを向かない。おかしいと思って振り返ってみると、後ろの席で美人が談笑中・・・なんてのは、日常茶飯事。

病院へ連れて行っても、いつの間にか、待合室のなかで一番可愛い好みの女性を選んで、何をどうしたのか（まだ、満足に喋れないくせに）膝の上でにっこり。これが、いまひとつ好みの女性がいないと、今度は、可愛がってくれそうなおじさん、おばさんを見つけるという身のこなし。う～ん、ただ者ではない。

ある夏の日、家族で市営のプールへ出かけた。まだ三人とも小さくて、長男は3歳か4歳だった。その長男がいなくなった。夫婦で大騒ぎで探した。と、園内放送が流れ、「迷子センター」に保護されているとのこと。「かわいそうなことをした。泣いているだろう」と引き取りに行くと、長男は、迷子センターの若いお姉さんたちに囲まれてニコニコ顔。「どうもすみません」と渋る長男を父親が連れ帰った。それから、わずか数分後、また、長男がいなくなった。ところが今回は父親が見ていた。長男はキョロキョロと形式的に辺りを見渡し、ルンルン顔で、自ら「迷子センター」に向かって行った。もちろん、父親に取り押さえられた。

★★★

(追記)

小さい時には、こんなだったが、二十歳を超えた今では、彼女一人いない。どうなることやら・・・。

★育児は育自 ***納得！？***

★育児は育自 ***納得！？***

《その1》

長男が小2の時、親から自分の産まれた時のことや、小さい時のことを聞くという生活科の学習があった。クライマックスは、親から子への手紙とそれへの子どもの返信。上の子の時、「ぼくをうんでくれて、ありがとう」などと感動ものが多かったのを知っていた私は今回は、自分も感動的に決めようと思って書いた。

「あすかくん（長男の名前）、あすかという名前は、飛ぶ鳥と書くんだよ。大空を自由に飛び回る鳥のように、大きくはばたけ！

自らの文章に酔いしれた私に届いた彼からの返信は、こうだった。

「おかあさん、ぼくは、とりじゃないから空はとべないよ」・・・納得！？

《その2》

私が幼稚園頃の話。運動会の「かけっこ」で、「みんなで仲良く並んで走りましょうね」と先生。

素直な私は、遅れて走ってくる友達を立ち止まっては待つては、走ったそうです。これ、ほんと・・・納得！？

《その3》

次男が宿題の漢字ドリルをやっていた。「『光』という字をつかって、みじかい文をかきましょう」という欄に、よく見るとこう書いてあった。

「天ごくの光をみる」次男曰く、「だって、地獄に光はないじゃろ」・・・納得！？★★★

★育児は育自 ***まいりましたっ！***

★育児は育自
まいりましたっ！

1月末に我が家にやってきたこのパソコン（現在は代替わりしています）周りの協力で、到着二週間を待たずして、ホームページを開設したのだが、私がパソコン超初心者であることに、かわりはない。それまで、一度もパソコンを触ったことがなかったのである。まだまだ未知の部分がいっぱいである。

ところが、時を同じくしてパソコンをいじり始めた長女（当時小六）は違う。次々と新しい機能をみつけて、いろんなことをやって遊んでいる。彼女がパソコンに向かっているのを見てみると、「今どうやったの？」「それな～に？」の連発である。

反対に、私がパソコンと取っ組み合いをしている時は、後ろから「お母さん、何やっとなね」と叱られてばかり。わたしは、相変わらずマウスをウロウロさせて、「えーっと、えーっと」とやっているのに、彼女はショートカットキーを覚えて「ポン！」おまけに「お母さんも少しは覚えたら」と言われる始末。

末っ子（小二）まで「この絵、保存しといてね」と来る。その末っ子が、パソコン雑誌の「トラブル解消法」なんてのを、難しい顔をして読んでいた。・・・「わかるわけ？」「うん、まあね」

オリジナルの壁紙に、可愛いアイコンを並べて、あっという間に画面も変わってしまった。「なんで分かるん？」と聞いてみた。曰く「こんなの感覚よ」・・・ドッシャー！

このまま長女に助けてもらう情けなさは永遠に続くのか。（今も続いている）・・・納得！？

★育児は育自 ***だだをこねるお母さん***

★育児は育自 ***だだをこねるお母さん***

子どもが小さい頃、つまり「乳児、幼児」と呼ばれる時期は、育児は体力勝負ですよ。どっちかという、とにかく大変なのは体、世話をするのも、一緒に遊ぶのも、体力ですよ。でも、小学生になると、離れている時間が多くなり、別行動している時、子どもが何をしているのか、わかりにくくなってきます。こうなると、もう道は極端に言うとなつしかありません。徹底的に調査して本人からも聞き出して根ほり葉ほり知るか、信頼してまかせるか。親は、どちらかなに腰をすえるしかないような気がします。体力じゃなくて心の方が大変になります。

子どもを信頼するというのは、難しいことだとは思いませんか。だって、つい最近まで母親の助けがなければ何もできないでいたんですから……。親には、その頃の記憶がバッチシ残ってますもんね。「自分の子どもを信頼する」というのは、裏返せば自分がしてきた育て方を信頼するということのように見えます。しかし、マイナス情報が入ってくると、「わたしが何か間違ってるのか」とか「お父さんが、協力しなかったからだ」とか、原因を探そうとしてしまいますよね。

でも、子どもは小さくても、一人の人間。確かに躰は大切だけど、親の付属品ではないんですよ。だから、親が教えたこと以外にも、いろんなところから情報を受けて生きているし、小さいながらも一生懸命、判断してるんでしょうね。

小学校高学年になると、本当に子どもの生活も、思いも、見えないことがあって、不安になることが多いです。でも、その不安を取り除く方法は、自分自身が一生懸命生きることしかないのかなあと、この頃思うんです。「お母さん」としてだけでなく、いろんな場面で、生き抜いていく後姿を見せること。そして、「いいお母さん像」に振り回されず、本音で付き合っていくこと。

私もまだまだ、そんな難しさの入り口で、大きなことは言えませんが、この頃、子どもの前で、だだをこねたりもできるようになりました。「お母さんだって、一人の人間だぞ。しんどい時もあるぞ」って見せていいのかなと思えてきたのです。「だから、そっちは本気でぶつかってこいよ！」って感じかな。

それと、専業主婦だと「お母さん一色」になりがちだけど、何か他の面を持つことも大事かなと思います。「お母さん」以外の顔で、外の世界と関わることを見せるというか、仕事に限らず、趣味でも、遊びでも、違う顔を見せて、「いつものお母さんとちょっと違うぞ。こんな面もあるんだ」なんて思わせるのもいいかなあと思っています。(いかにも見てくださいじゃなくて、あくまで、自分自身のために)
私自身は、このホームページ作りで、外に広がるうとしているし、教会から家でできる用事を請け負ってきたりしています。なんていうか「べったりお母さん」じゃなくて、少しづつ穴を開けていこうというか、子どもとの間にいい風を通していこうというか。

偉そうに言っても、うちの長女が、今春小学6年生。まだまだ序の口、これからです。今だって、ちっともうまくなんか言っていないんですよ。こんなこと書いても……。

「蛇行する川には蛇行の理由あり 急げばいいってもんじゃないよ」と(俵万智「チョコレート革命」河出書房新社)という歌を思い出しながら、ぼちぼちと蛇行しながら生きています。★★★

★育児は育自 ***ある参観日***

★育児は育自 ***ある参観日***

小学校1年の次男の参観日での出来事。

その日は「からだのおべんきょう」といって、いわゆる性教育の一環となる授業。

次男は、上の二人と違って、参観日には大はしゃぎするタイプ。ちょうど、彼の机のすぐ横に私が立ったので、大張りきりです。

べんきょうは、体の各部分の呼び方を覚えるところから始まります。「ここは顔、ここは首」と先生が教えて「ここは？」とみんなに呼びかけます。どの質問にも次男は大声で「はい！はい！」と手を挙げます。

彼の発言が回ってきたのは「胴」という言葉を教えてもらっているときでした。「ここは、何て言ったかな？」先生の質問に、またも大声で手をあげ、ついに当てられた彼。もう、得意満面の笑顔で答えます。

彼「ここは、胴です」私（そうそう、それでいいのよ）

私の思いを通り越すように、彼の発言は、さらに続きます。

彼「胴の胸のところには、固いところがあります。そこが肋骨です」

先生「そうだね」私（そんなこと聞かれてないよ）

彼「肋骨というのは、心臓や肺を守る役目をします」

先生「よく知ってるね。大切なことだね」

さらに彼「頭には、トウコツという骨があります。これが脳を守ります」

先生、「う、うん」私（もういいから・・・）

彼「トウコツはとても堅く、これくらいでは割れません」

やおら、自分の頭を、机にガツンとぶつけてみせた！

一同大爆笑。受けたことに大満足のかれば、授業の流れなど、どこ吹く風。得意そうに椅子に座って、ニタリと笑い、もう一度、頭をガツン。再度一同大笑い。

え？私ですか、さっさと上の子の教室に移動しましたとき。（こいつ、説教爺さんになるんだろうな）★★★

★育児は育自 ***さんぶんのいち***

★育児は育自 ***さんぶんのいち***

ある日の午後、子どもたちがテレビゲームをしている横に転がって、うたた寝をしていた。そのうちぐっすり眠り込んでしまったらしく、ふと気がつくとゲーム機はきれいにかたづけられ、子供達三人は、隣の部屋に移って、トランプをしていた。寝転がったまま、トランプに興じる子どもたちの声を聞いていたら「三人で遊べるようになったんだなあ」とその成長を実感して、小さかった頃のことをいろいろ思い出した。

二つずつ違う三人兄弟。子どもたちは元気だったが、わたしは元々体の丈夫な方ではないので、三人を産むだけでも大変だった。二人目を出産した後、体調をひどく壊した。目が回ってたっていられなくなったり、精神的に不安定になったり。

今でも思い出すと胸が苦しくなる思い出がある。二人目を出産してしばらくして「二歳を過ぎたから」という理由で、上の子のトイレトレーニングを始めたことだ。今考えれば、もっと落ち着いてからでも良かったのに、初めてのことで焦っている自分がいた。トイレトレーニングは、二日や三日でできるものではないのに、片手に赤ん坊の私は、イライラして、長女がおもらしするたびに、ひどく叱った。そしてその数日後、長女は泣きながら私のところへきて「おむつをしてください」と言ったのだ。あの時の辛そうな顔と声は、今でも忘れられない。二歳の小さな子に、取り返しのつかない心の傷を与えてしまったのだ。

体調を壊して内科へいったら、「出産後三年は体は元に戻らないですよ」と三人を二歳ちがいで産んだことを非難されて、薬ももらえないことがあった。

体力的にも、精神的にも弱い私。三人もの子どもを産んだことが間違っていたのだろうかと考えたことも、何度もあった。三倍の体力と、三倍の愛情でひとりひとりに十分なことをしてやれたら、どんなにいいだろう。だが、現実には、あの頃も、今もひとりにつき「さんぶんのいち」だ。それが私の精一杯。

三人がトランプをする声を聞きながら、私は、この情けない「さんぶんのいち」の母親でも、優しく、大きく育ててくれた子どもたちのことをまるで魔法のようだと思った。これはきっと神様の魔法なんだ。なんでもご存知の神様は、私が「さんぶんのいち」お母さんだっただけで存知のはず。それでも三人の母親にしてくださったのは、神様の魔法以外にありえない。私には最強の味方がいるんだ！★★★

★育児は育自 ***その子を見る***

★育児は育自 ***その子を見る***

NHKテレビで、白クマの人工飼育に取り組んでいる動物園の短い番組を見た。白クマというのは、北の冷たい海にもともと住んでいて、そこは、細菌がとても少ないので、日本の動物園で育てるのは、とても大変なのだそう。番組では、その白クマの担当になった飼育係の人が、毎日、自宅にクマを連れ帰って、懸命に育てる様子を伝えていた。

番組の進行は、主に、その動物園の園長と進行係のアナウンサーの話で進められた。その園長は以前、別の種類のクマの飼育担当をした経験があると話をした。そのクマの担当になったかれは、知識をいっぱい仕入れ、マニュアルで頭をいっぱいにして、飼育に臨んだ。そのクマは、静かな環境で育てられると知って、自宅へ連れ帰っても、物音を立てないように気を使い、育てたのだそうだ。だが、それが裏目に出て、そのクマは、大きな物音を聞いたショックで死んでしまったという。

園長は、何度も繰り返して言っていた。今回は、白クマの飼育の前例がなく、手探りで、とにかくその子（クマのこと）の状態を見ながらやっていったことが成功につながったのだと。「どの動物もマニュアルでなく、その子、その子なんです」となにも言っておられた。

その言葉は、そのまま人間の育児に当てはまると、私は思った。うちには、三人の子どもがいるが、上の子にうまくいった方法でやろうとしても、下の子にはうまくいかないことが、何度もあった。「その子、その子の今の状態をしっかりと見て、触れて、知ること。それが大事なのだ」とまた園長の言葉がよみがえってくる。

親の希望・主義・主張・世間に山とあるマニュアル・・・それにばかり目が向いて、その子自身をよく見ていなかったということは、私には何度もあった。最初の子のとき、一歳までは生水も生のもも与えない、と神経質に育てていた。当時、実家へ連れて行くと、亡くなった曾祖母がよく長女を散歩に連れて行ってしてくれた。そのとき曾祖母は喫茶店に寄っては「暑いでしょ」とこっそりアイスコーヒーを飲ませていたことを、後で知った。親は生水を飲ませてはいけないという言葉に縛られていて、長女が暑くてのどが乾くということに、気がついていなかったのだ。だから、水筒もなにももっていない長女がどこで給水をしているか、考えてもみなかった。そのおかげで、長女は無類のコーヒー好きだ。

「その子を見る」大きくなっても、いや大きくなるほどに、これは大切なことだと思う。動物園の園長の言葉「その子を見る」をしっかりと胸に刻んでおこうと思った。★★★

★育児は育自 *** 南海の大決戦***

★育児は育自
*** 南海の大決戦***

ある夏休みの昼食時。
テーブルの向こうにある扇風機が、首を振っていない状態だった。

一番遠くて風のあたらない席の次男が、一番近くにいる長女に「お姉ちゃん、扇風機回して」と頼む。食事を始めていた長女は「やだ！」とつれない返事。
すると次男は「立ってるものは親でも使えって言うじゃろ！」
すかさず、私が「みんな座っとるよ」

「うっ」とつかえた次男、訳のわからない言葉をつぶやき始める。「河童の川流れだな・・・」「なんじゃそりゃ」非難の嵐。

かわいそうなので「座ってる兄は、立たせても使えだな」と長女の次に近くにいる長男を見て私が言う。「何、言うとるんね」長男も知らん顔。
「う～ん、受けなかった」と内心悔しがる私。

今度は次男、私に対して訴える。「負うた子に教えられっていうじゃろ」

ところが、前夜、熱心に「タコ」についてのテレビ番組に見入っていた次男が、実際に発音した言葉は、「大タコに教えられって言うじゃろ」だった・・・

「大タコに何を教えられるんね～と激しく兄弟から突っ込まれる次男。

こうして我が家の食卓は、いつの間にか「真昼の南海の大決戦」と化したのであった。

いつも、こんな調子のアホな家族です。ハイ。★★★

★育児は育自 ***次男とかさ***

★育児は育自
次男とかさ

雨の日のこと。

朝、傘を持って出かけたはずの小三の次男が、ずぶぬれになって学校から帰ってきた。私は驚いて「かさ、どうしたん？」と聞くと「友達のと間違えて持って帰った」という。

着替えさせてから、ゆっくり話を聞いてみると、かさを自分のものだと思って学校を出て、少し歩いてから雨足が強くなったので、さそうとした時、友達のと間違えたことに気づいたと言う。それで、ささずに、そのまま濡れて帰ってきたのだ。

「そのかさをさして帰ればよかったのに」と言うと、次男は下を向いて黙っている。きっと、かさを間違えた気づいた時に、悪いことをしたと思い、かさがなくて困っている友達のことを考えてさすことができなかったのだろう。そこまで意識していなかったとしても、なんとなく、人のかさをさすことができなかったのかもしれない。

翌日、友達のかさをもって登校する次男に「お友達に謝るんよ」と声をかけると大きく頷いて元気に出かけて行った。

帰ってきてから、その子が前日どうしたか気になったので聞いてみたら「僕のかさをさして帰ったんと」と言う。きっと先生に言って、残っているかさから、間違えたことがわかったのだろう。「お友達が濡れなくてよかったね」と言うと「うん」と嬉しそうな笑顔が次男の顔に浮かんだ。★★★

★育児は育自 ***おつかい***

★育児は育自
おつかい

うつ病の私にとって、食事の支度は、調子のいい時でも苦痛なもので、しょっちゅうコンビニのお世話になっている。コンビニに買いに行くのは、たいてい次男の仕事。別に誰でもいいのだが、他の子達は、もう食べるものが決まっていて、次男は行って見てから決めるのがいいと言う。それで、次男がほとんどコンビニ係になっている。

先日も、次男にコンビニへの買い物を頼んだ。その時、父親の酒のつまみも一緒に頼んだ「お父さんには、ニューコンビーフを買ってきて」いつも行くディスカウントストアには、コンビーフは置いてないので、いつもと同じお安いニューコンビーフを頼んだのだ。

さて、コンビニからの長い買い物から帰ってくると（彼は店内を、その都度くまなく回って、美味しいものを探らしい）袋から、買ってきたものをとりだしはじめた。ちゃんと父親のニューコンビーフも買ってきてくれている。で、続いて袋から出てきたのが、なんと『本物』のコンビーフだった！「これ、どうしたん？」と聞くと「僕の」と言う。

食事を始めると、彼は『本物』のコンビーフを開けて、マヨネーズをつけて食べ始めた。「これが、おいしいんだよね〜」

ああ、違いのわかる男、我が次男！！★★★

★私の本だな 《吉村達也》 1 ***不思議な夢***

★私の本だな 《吉村達也》 1 ***不思議な夢***

推理小説の紹介をするというのは、本当に難しいものです。読む前から犯人がわかるようなことを書くわけにはいきませんし、あんまり詳しく事件を描き過ぎても、読む時面白くないですね。だから、結局、内容については、本のカバーに書いてあるのが限度ということになります。

じゃあ、私がやろうとしていることは、何なんですか？感想というか、読んで考えたことを、ちょっと書いて、その本を手にとってもらうまでのガイド役というところでしょうか。

なにはともあれ、好きな本や作家について、なんだかんだとウンチクを傾けるのが、ファンにとっては喜びなのです。（自己満足ですね・・・）

で、前置きが長くなりましたが、今回おすすめする本は、「読書村の殺人」（中公文庫）もちろん吉村達也さんの本です。「読書」と書いて「よみかき」と読みます。実際にある地名だそうです。（巻末の「あとがき」参照）。

この本を一冊だけ読むのも、もちろん面白いですが、同じ人物を主人公にした「時の森殺人事件」全6巻（中公文庫）を読んだ後に読むのが、正しい読み方です。事件の経過としては「読書村」の方が先にあって、その次が「時の森」なのですが、書かれた順番は逆で、「時の森」のあの人物よもう一度と「読書村」が執筆されています。まあ、どっちにしても、両方良いのですが、今回は、あえて「読書村の殺人」です。

この本を最後まで読み終えた時、私は、かつてない不思議な心理状態になりました。なんだか、まず、呆然としていて、それから、気がつくと、野原にいるのです。そして、その野原は、自分の「心」の風景だと、なぜか「わかる」のです。私は野原を進んでいきます。時々小さな花も咲いている。ここは私の心の表層なのです。

そして、私はその野原にぽっかりと空いた井戸のような穴を見つけます。その下に、私のもっと「深い心」があることを、私は「わかっています」暗い情念、ドロドロした情熱・・・それらが、その下を流れているのです。引っ張り込まれそうになるのに、のぞかずにはいられない・・・。

なんだかホラー小説のようになってしまいましたね。でも、この本を読むと、自分の心のもっと深くにある情念について考えてしまうというか、気付いてしまう。私にとっては、そんなちょっと危ない本だったのです。

「時の森殺人事件」については、またあとで。★★★

★私の本だな 《吉村達也》 2 ***リンクする読書***

★私の本だな 《吉村達也》 2 ***リンクする読書***

今回は、「『長崎の鐘』殺人事件」（トクマ・ノベルズ）という本を取り上げて、私の読書体験を語ってみようと思います。

この話の中で、事件に巻き込まれる国会議員の家族は、妻が新興宗教に入信したことなどで、信じ合えない壊れた家族です。自分の妻を殺人鬼ではないかと疑う父親に、息子が、投げつけるこんなセリフがありました。

「人間はね、オヤジ、鏡の役割をするんだよ。相手の人格を映し出す鏡の機能を持っているんだ。もしもオヤジが母さんのことを悪魔だと感じたなら、それはオヤジ自身が悪魔だからだ」

このセリフに出会った時、私は、ハッとしました。ちょうどその頃、いろいろなことがうまくいかず、それがみんな周りのせいのような気がして、イラついていた私でした。

「相手が悪い」と感じるということは、このセリフのように、人間が鏡の機能を持っているなら「自分が悪い」ということが映し出されていることになります。

そんなことを考えていたら、ずっと以前に読んだ「100万回生きたネコ」（佐野洋子作・絵 講談社）という友人にもらった絵本のことが、なぜか頭に浮かびました。

この絵本に出てくるネコは、様々な飼い主に愛されて生きるのですが、いつも、その飼い主のことが大嫌いなのです。そして、ネコが死ぬと、飼い主は、ネコを葬るのですが、また生き返り、別の飼い主に飼われるのです。そんなことを100万回繰り返し、死ぬことなんて何でもないネコ。

しかし最後に、ネコは、あるネコのそばで、初めて安らぎを覚え、愛することを知りました。そして、今度は、もう生き返ることがなかったというお話です。

なぜか私の心は、「『長崎の鐘』殺人事件」から、この絵本にリンクしていました。もうずっと前に読んで、特に好きでもなかった、ほこりをかぶったこの絵本に。

ネコには、愛がなかったので、飼い主がいくら愛してもその愛が映らなかった、見えなかったのです。100万回も生きて、相手の中の愛が見えなかったのです。でも、最後に一匹のネコを愛したことで、そのネコに映る自分の愛を知り、そして、相手の愛も知ったのです。

神様は、ネコに100万回もチャンスを与えて生き返らせ、辛抱強く愛を与えられたのです。

血なまぐさい殺人事件の本の一節から、私の心は、次々とリンクして、100万回ものチャンスを与えられる大きな神の愛に気づいたのでした。

読書というのは不思議なものです。昔読んで、もう忘れたと思っていた本が、全然別の本に刺激されて、記憶の引き出しから出てくることがあります。

「『長崎の鐘』殺人事件」は、吉村達也さんの百冊目の本です。そして、主人公は、私の好きな朝比奈耕作です。今回は、ずいぶん脱線してしまいましたが、この本のラストが、作中のある人物の祈りの場面で終わっているのも、何かの暗示だったのかもわかりません。事件の内容の方も面白いので、ぜひ、手に取ってみてください。★★★

★私の本だな 《吉村達也》 3 ***変わる自分***

★私の本だな 《吉村達也》 3 ***変わる自分***

吉村達也氏の「温泉殺人シリーズ」の最新刊（99年7月末現在）「地獄谷温泉殺人事件」（講談社文庫・文庫書き下ろし作品）は、期待を裏切らないおもしろさだった。読者は、早くからまだ人に発見されていない死体が存在することを知らされている。しかし、それが誰なのか、殺人者が誰なのかは、最後まで明かされない。読み進むにつれて、それは、ますますわからなくなるという趣向である。もちろん、土壇場においても、二転三転するおもしろさ！

この作品の底を流れるテーマは、「時代の流れの中で変わるものと変わらぬもの」だ。事件の中心にいる女性は、人は時を経ても変わらないという錯覚を持っている。その変わらぬものの象徴として、作者は人の「声」というものを中心に据えている。登場人物たちは、大学時代、放送研究会に関わったという設定が、それを余計に際立たせている。彼らは、それぞれに個性的な声を持ち、また、声というものに関心が深いのだ。

今回は、いつもはどちらかというドジな役回りが多い和久井刑事が、鋭く「本当に人は変わらないのか」という指摘をするところもおもしろい。

学生時代の友人との再会は、朝比奈耕作シリーズ「邪宗門の惨劇」（角川文庫）で、すでに扱われている。ここで、主役の朝比奈は、「昔と変わっているかもしれない」という慎重な態度を示している。

これらの小説では、どちらかといえば、マイナスに変わることが描かれているが、「精神衛生本」と称する、吉村氏の「多重人格の時代」（青春出版社PLAY BOOKS）という本の中では、「人生は、やり直しができる」というプラス面が強調されている。

そして、「日本国殺人事件」（ハルキ文庫）では、登場人物に、「過去はかえられない、というのはウソです。過去をどう解釈し、どう評価し、これからどう扱うかによって過去は変化するものです。過去は現在と未来の力で、じゅうぶん変えられるものなんですよ」と発言させている。

人は、確かに、簡単には、自分の思う通りに変わらない。どちらかという、境遇によって歪められて、変わってしまうことの方が多い。だが、吉村氏は、「変わるのだ」「やり直しができるのだ」「過去さえ変えることができるのだ」と語りかける。

「地獄谷温泉殺人事件」の中の人物にも、やり直しを目指す人物が、一人登場する。しかし、殺人事件という小説の枠の中で、彼女が「昔と違う」ということに不都合を感じる人物によって、それは、悲劇へと導かれてしまうのだ。

吉村氏は、「人生はやり直しができる」と主張する。彼は、自らの小説に登場する殺人者に、それを教えてやりたいと思うのだと書いていた。「やり直しができない」と思うところから、悲劇は始まる。私たちは、どうしようもなく見える惨劇の中からさえ、こんな希望を得ることもできるのだ。

まさに、クライマックスで、ストーンと暗転するような「地獄谷温泉殺人事件」のラストシーン。この後、彼女がどのように現実をとらえ、癒されていくのか、想像の余地をたっぷり残して、この小説は終わっている。吉村氏の描く、血なまぐさい殺人事件を、なぜ私は読むのか？その底にある癒しのメッセージが、一つの答えかもしれない。★★★

★私の本だな 《吉村達也》4 ***他人の人生を横切る私***

★私の本だな 《吉村達也》4
他人の人生を横切る私

昨年（1998年）の休眠状態から、一転、吉村達也のあの多作ぶりが戻ってきた！わずか半年ほど前に、このサイトで、「最新作」として紹介した「地獄谷温泉殺人事件」（講談社文庫）の後、現時点で（'99 8/21）で、もう既に、2作の新作が出ている。一つは、ホラーで「i（アイ）レディ」（角川ホラー文庫）、そして、現時点での正真正銘の最新刊は、ケイブンシャノベルスの「怪文書殺人事件」である。

容疑者は、たった二人。二転三転する場面に、踊らされる。しかし、ここまで、それぞれのシリーズの主演を飾ってきた、氷室想介と烏丸ひろみの共演で、さらに場面は盛り上がっていく。

推理小説として、申し分なくおもしろい作品であると同時に、この小説は、哀しい小説である。

「正義と優しさ」それとも「人情」という言葉を使った方がいいだろうか。いや、この小説を流れる深いテーマは、人が他人の人生を横切るときにつけてしまう、どうしようもない傷を取り上げている。

傷つけるつもりではない正義の行動が、自分の知らぬところで、他人の人生を大きく狂わせてしまっていた。どうしようもない状況・・・それは、気づかないだけで、私たちにもあるのではないだろうか。

そのことを知ったとき、私たちはどうすればいいのだろうか。償うことのできない他人の人生の傷を癒すことは、人間を包む大きな存在にしかできないことではないか。私たちは、祈ることしかできない・・・

この小説のラストは、実に哀しい。そして、それに続くエピローグは、どうしようもない悲しみに襲われた読者の心を、優しく包んでくれる祈りである★★★

★私の本だな 《吉村達也》 5 ***純粋さが背負うもの***

★私の本だな 《吉村達也》 5
純粋さが背負うもの

朝比奈耕作シリーズの最新作（'99 9月現在）「地球岬の殺人」（ハルキ・ノベルズ）は、実に後味のよい素敵な小説に仕上がっている。

容疑者となる物語の中心は、若者のカリスマ的存在になっている人気絶頂のロックバンドのメンバー5人。その一人は、すでに、冒頭で、過去に殺人を犯していることを明かされている。しかし、それに続く連続殺人の犯人は、一体誰なのか？

彼らのヒストリーブックを担当することになった推理小説家・朝比奈耕作の頭脳は、今回も冷静に推理を進めていく。そして、辿り着いた真相とは？

推理小説というよりも、青春小説と呼びたくなるように、登場するロックバンドのメンバーの純粋な音楽への情熱と、それゆえのメンバーの固い結束が描かれていく。

彼らは、その純粋な情熱のゆえに、苦しみやつらさを背負い、音楽に妥協せず、また、自らのカリスマ的立場をも、冷静に受け止めている。

自分を振り返ってみると、40歳を目前にして[当時]何をしたいのかまだ定まらずにいる姿が不甲斐ない。文を書くことが好きで、こうして公開しているものの、プロになるほどの気迫はない。そうかと言って、主婦に徹しているわけでもない。それは、それで、私の生き方なのだが、この本を読んでいて、思い当たることがあった。私は、昔からずっと、純粋に何か情熱を傾けて生きて行くときに、背負わなければならないであろうものを、恐れてきたのではないかと。それゆえに、ひとつのことに純粋に打ち込めないのではないかと・・・純粋であると言うことは、時として、残酷なほどに苦しく、辛いものでもあるのだ。

さて、本編の朝比奈耕作の辿り着いた真相は、真実だったのか？

ラストシーンで、朝比奈が自分に言い聞かせる言葉「これでいいんだよね。こういう結末があってもいいんだ」に、私は熱く心を打たれてうなずいた。

えっ？どんな結末かって？それは、ご自分でお確かめください。今回は、珍しく、血まみれシーンがないので、そういうのが苦手な人にもお勧めです。★★★

★私の本だな 《吉村達也》 6 ***番外編 「吉村オタク」でございます***

★私の本だな 《吉村達也》 6
番外編 「吉村オタク」でございます

私が大ファンで、当サイトの掲示板に、二度も来てくださった推理作家の吉村達也氏。彼には、推理小説、ホラーの他に「精神衛生本」と自ら分類されている部類の著書がある。

「多重人格の時代」（青春出版社）これは、題名に惹かれ、おもしろそうだなと思って買った。おもしろかった。

「がん宣告マニュアル 感動の結論（アミューズブックス）これは、がん告知に興味があったので、随分と探し回って、買って読んだ。これもよかった。

「正しい会社の辞め方教えます」（カッパノベルス）これは、さすがに専業主婦の私には関係ないし、買わない宣言をした・・・けど、本屋で手に取り、思わず買ってしまった。やっぱり買ってよかった。

そして、今回、吉村氏は、さらに新たな分野の本を手がけた。それは、なんと英語の学習本！その題名も「たった3ヶ月でTOEICテスト905点とった」（ダイヤモンド社）

この本が出ると知ったとき、私は「TOEICテスト」なるものが存在するの知らなかったし、英語を再学習しようなどという思いもなかった。だから、いくら作者が大ファンの吉村氏でも、この本だけは買うことはないだろうと思った。が・・・なぜか、本屋で、私は「語学コーナー」の前に立っていた。そして、この本を買ってしまった・・・なんの目的もなく。

ところが（また「が」なのだが）この本、おもしろいのだ！吉村氏が実際にやった学習法と成果を綴った本なのだが、まずおもしろいのが、英語学習本のくせに、縦書きなのである。つまり「こんな単語を覚えろ」とか「この文法を勉強しろ」という本ではないのだ。英語なんか、ほとんど書いてない！

しかも、彼がなぜ英語を勉強しようと思ったか？そこがまたユニークなのだ。英語をしゃべれるようになるという目的ではなく「英語的な論理構造によって日本語にももの考え、英語的な論理構造によって日本語をしゃべれるようになったら、もっと物事をクリアに解決でき、自分の気持ちもはっきり表現できて、非常に気持ちのよい人生が送れるのではないかと思ったのだ」という。

そして、その学習法たるや、既成の学習法にとらわれず「先生は私だ」と宣言し、自ら、社会人にあった学習法を考え出し、パソコンやケーブルテレビなどをフル活用した、まさに、目からウロコの方法なのだ。

彼は言う「とんがっていない好奇心は、好奇心とはいえない」そして、その「とんがった好奇心」こそが、驚異の集中学習を可能にしたのだと。「とんがった好奇心」とは、「○○ができたらなあ」ではなく、より具体的に「○○をしたい」と強く絞り込まれたゴールを持った好奇心のことなのだと思う。

このあたりから、もうこの本は、単に英語学習本ではなくなっている。人生を語る本になってしまったのだ。何しろ、彼自身が、実際にやったこととその成果を、彼独特の理論武装を交えて書かれた本である。英語を学ぼうとする人だけが読むなんてもったいない！本屋の「語学コーナー」以外のあっちにも、こっちにもこの本をおいてほしい！と思うのである。

この本は、人生に刺激を与えてくれる。英語なんてどうでもいい人にも読んでほしい。既成の考えややり方にとらわれず、自ら考えながら積極的に生きていくことを実践した本なのだ。

この本を手に取り、しばらくためらってからレジへ行った私を見て、娘は私に「吉村オタクになったね」と言って、ニヤリと笑った。

こうなったら、とことんオタクになりましょ！今は、うつ病で少々サビついている私の好奇心のアンテナだが、めいっばいのばして吉村達也という人間を追いかけていきましょう！そうすれば、私のおんぼろアンテナだって「とんがった好奇心」をいつか探し当てられる気がするのである。★★★

（追記）

吉村達也氏は、2011年に60歳で天へ旅立たれました。彼の死は、彼自身が書いた「ヒマラヤの風によって一進行がん、余命3週間の作家が伝えたかったこと」という本に詳しく書かれています。

★私の本だな 《吉村達也》 7 ***不思議の国への誘い***

★私の本だな 《吉村達也》 7 ***不思議の国への誘い***

「時の森殺人事件」はC★NOVELSで1992年4月から93年1月までの間に刊行され、のちに中公文庫で発売された。さらに、昨年、ハルキ文庫版が発売されているので、これから購入する方は、ハルキ文庫版が最も手に入りやすいだろう。しかし、ハルキ文庫版には、従来にはなかった1巻ずつの副題が付いており、「暗黒樹海篇」「異形獣神篇」とおどろおどろしいものになっている。私としては、内容の複雑怪奇さと対照的な「時の森殺人事件」というシンプルな題名が好きだっただけに、これには納得しかねている。が、内容は同じなので、副題にあまりこだわらず、読んでいただければと思う。（お前は出版社の回し者か！）さらに余談だが、我が家には、ノベルズ版と中公文庫版の二種類がそろっている。これは、文庫版の4巻についている解説の中で、新保博久氏が「今度の文庫版には結末がリニューアルされるかもしれない」という含みの言葉を述べているのを真に受けて、古本屋を探し歩いてやっとノベルズ版を手にいれたという経緯がある。ただし、結末は全く同じ内容だった・・・といういささか悲しいオチがついている（オタクやるのも楽じゃない!?)

いよいよ本題に入ろう。「時の森殺人事件」は、完全に体験型の小説である。「時の森」とは「時の杜（もり）地区」という架空の場所にある森の名前なのだが、事件は、その森で一人の美少女が殺されることから始まる。読者は、自ら「時の杜」の住人となって、推理しながら読んでいくという形になる。なぜなら、通常の小説の場合は、登場人物の誰かに自分の感情を移入して読むことが多いと思うが、この小説には、50人も登場人物。「時の杜」のほとんどの住人と殺人捜査の警察官たちが出てくるのだ。本を手にした読者は、まず、巻頭に絵入りで登場人物の紹介が数ページにも渡ってあることに驚かされるだろう。そして、読者は、特定の人物を通してではなく、さながら神の目を与えられたごとくに「時の杜」で起こる様々な不可解な出来事や殺人の情報を与えられる。最終巻の6巻の冒頭には「時の森殺人事件 残された50の謎—完結編を読む前に」という箇条書きの作者からの謎の提示が掲げられ、そこまで読み進んだ読者は、もうすでに、変わり者と美女ばかりが住む「時の杜」の住人になっているはずだ。

いつものように、詳しい内容は、これから読む読者のために書けないが、圧巻は、そこで起こる連続殺人事件の「動機」である・・・と明かすのは、ここまでにしておこう。

今しも「時の杜地区」に新居を構えることになった若い作家夫妻が、「時の杜」への道を急いでいる。この車に便乗して、あなたも「時の杜地区」を訪ねてみることをおすすめしよう。そこには、こんな看板があなたを待っている。「ようこそ時の杜へ」★★★

★私の本だな 《吉村達也》 8 ***吉村氏は、どこへ行く***

★私の本だな 《吉村達也》 8
吉村氏は、どこへ行く

2000年、第一弾となる吉村氏の新作「天井桟敷の貴婦人」（トクマ・ノベルズ）は、「朝比奈耕作の事件簿」という新シリーズとして、推理作家朝比奈耕作が自らの経験を語るという形で書き下ろされた。個人的に、朝比奈耕作シリーズのファンである私は、大いなる期待を持って、この一冊を一晩で読破した。本のカバーには「ミステリーの醍醐味は意外な結末にあり」とすれば、本作はまさにゾクッと鳥肌の立つまさかの終幕が用意されている」と記され、帯には「朝比奈耕作は、密室殺人の謎を解いた。だが、幕は下りなかった」との刺激なキャッチが。しかも、最近、大長編ともいべき長さの作品が続いていたところ、その約半分のページ数。こうなりゃ一晩で、一気に読み終えたいくなる、いや、読むしかない！

ところが、残念ながら、この作品は、私の期待を満たしてくれなかった。例えば、「『戸隠の愛』殺人事件」（徳間文庫）のような意外な結末を期待していた私は、完全に裏切られた形となった。密室の謎を解くまでは確におもしろいのだが、その結末は、論理的に説明のつかないホラー小説のような結末だったのだ。

朝比奈耕作といえば、明晰な頭脳で不可能と思われる状況を、合理的に説明する人物。その人物の新シリーズとなる第一作がこの結末なのか・・・私は、ぼう然とするしかなかった。

2000年第一弾とこの小説を紹介したが、実は、小説ではないが「京都瞑想2000」（アミューズブックス）という本を吉村氏は、一月に発行している。残念ながら、この本はまだ手に取っていないのだが、その題名から連想されるのは、氷室想介シリーズの大プロジェクト、第一作「京都魔界伝説の女」（カッパノベルズ）である。しかも、吉村氏は、この時期、京都に新しい職場を構えたという。「京都魔界伝説の女」は、私にとっては、吉村氏の自説を、登場人物に語らせる部分があまりに多く、ストーリーが流れていない残念な作品だった。

吉村氏は、すべての謎が合理的に解決される推理小説から、作風を変えようとしているのか？私は、個人的には、合理的、科学的に説明できないこと、わかりやすくいえば、霊の存在などを頭ごなしに否定しない。むしろ、そのような存在を感じやすいタイプといってもいい。

しかし、それと、吉村氏の「推理小説」とは別だ。「推理小説」と銘打つ以上、謎はすべて解決されるべきではないか？例えば「時の森殺人事件」（ハルキ文庫）で、山のような超常現象にも見える謎をすべて解いて見せたように・・・。解決のできない超常現象で結末をつけるのは、果たして「推理小説」と呼べるのか？

吉村氏が、今、すべてが合理的に説明できる世界の、外の世界に興味を示しているのは明らかであると、私には思われる。「京都魔界伝説の女」「天井桟敷の貴婦人」と、これまでの「○○の惨劇」「○○の殺人」「○○殺人事件」というタイトルから離れて行っているのも、そのせいではないのか？

本作の帯には「朝比奈耕作シリーズ 四季の殺人1」として、既刊の「『吉野の花』殺人事件」の広告が掲載されている。吉村達也氏は、「推理小説」の域を脱しようとしているのか？「あの」朝比奈耕作は帰ってくるのか？「四季の殺人」の第二作目の刊行が待たれる。★★★

★私の本だな 《吉村達也》 9 ***美のおごり***

★私の本だな 《吉村達也》 9 ***美のおごり***

「新幹線秋田『こまち』殺人事件」は、1997年8月、カドカワ・エンタテインメントというシリーズで、発売された。このシリーズは、従来のノベルズ版より一回り大きい本になっている。また、ノベルズ版が、通常二段組みなのに対して、一段組みに成る予定だった。なぜ、「予定だったかといえば、実際にこの本を見てもらうとすぐにわかるのだが、本文が二段組みになっているのである。

実は、この、我々素人には「本が一回り大きくなっただけ」という変化が、吉村氏を苦しめることになったのだ。プロの作家には、書きやすいフォーマットのようなものがあるらしく、巻末に、一段組みで書かれた初稿の書き出し部分が載せられているのだが、どうも、吉村調が出てこない・・・という感じなのである。ご自身「レイアウト重視型」と称しているだけあって、ストーリーが流れなくて苦しんだという。そして、ついに、編集担当者に、二段で書くことを特別に認めてもらったという、いわく付きの作品なのだ。この(2000年)5月には、カドカワ文庫から、文庫版が発売予定なのだが、彼の場合、単に、同じ作品を文庫に変えるだけでなく、文庫版の文字組みのテンポに合わせて改稿しているのだとか。プロの厳しさというか、こだわりを感じて思わず「がんばってください」と声をかけたくなる。(かけたところで手助けにもならないが)

さて、本文に入ろう。この事件は、一人の女性が社員旅行の下見に秋田路を訪れた途中に、同行していた課長にレイプされるというところから始まる。その第1章は「顔見知りの間でレイプが成立すると思いますか」というショッキングなタイトルで始まっている。彼女は、泣き寝入りをせず、警察に駆け込むが、忘れるのが一番と諭されて、ついに、上司に打ち明ける決心をする。ところがこの上司も彼女の味方ではなく、むしろ、彼女のガードの甘さを責め立てるのだった。ところが、その1ヶ月後、レイプした犯人ではなく、相談した上司が、秋田新幹線「こまち」の車内で殺されてしまう。なぜ、そのような殺人が起きたのか。彼女は、偶然電車の中で見かけた推理作家朝比奈耕作に助けを求めて、レイプされた時と同じ旅程での旅に、同行して欲しいと頼み込む。

この作品は、殺人事件のトリックそのものより、その動機の解明、そして、どうしてレイプ事件から、殺人事件へと発展して行ったのかという彼女を含む、車内の人々の感情を、朝比奈耕作が解いていくところが圧巻だ。彼女は、本当に「単なる被害者」だったのか・・・「秋田小町」と呼ばれる美女の心に隠されていたおごりとは？そして、最後に現れる、もう一人の人物とは？

朝比奈耕作は、細やかな感情に非常に敏感な人物として、描かれている。それは、作家という職業柄のせいもあるだろうが、彼の底にあるものを知るまでには、彼の過去を読むのがいい。私は、この作品を読む方に、まず、彼の出生の秘密にまでさかのぼる「花咲村の惨劇」から始まる「惨劇の村シリーズ」5部作(徳間文庫)を読んでいた方がいいと思う。朝比奈ファンのささやかなお願いである。(勝手すぎるかな)

もちろん、巻末の取材ノートでは、取材した秋田路の魅力がたっぷりと書かれていて旅情をかき立てられる。これもまた、吉村作品のいつものお楽しみの一つだ。

★私の本だな 《吉村達也》 10 ***眠れない夜に***

★私の本だな 《吉村達也》 10
眠れない夜に

久々の吉村氏の新刊「『倫敦の霧笛』殺人事件」（角川文庫）は、かつて三冊出された「ワンナイトミステリー」シリーズの第4弾である。私としては、とりあえず、買って置いて、このシリーズのコピー通り「眠れない夜に」気軽に手に取るのにちょうどいいオススメ本だ。主演は氷室想介。

前3作の「ワンナイトミステリー」は、「ワンナイト」という長さにこだわりすぎて、少々ボリュームに欠け、内容の掘り下げも、「もうひとつ」の感があり、不満が残ったが、今回の作品は、ボリュームも少しアップして、ちょうどよい。

物語は、ロマンティックに結婚したものの、さめかけてしまった夫婦の妻に、思いがけぬ財産が転がり込むという、どこにもありそうな始まりである。しかし、そのトリックと、吉村氏ならではの最後のどんでん返しは、まさに「眠れない夜」を満足させてくれる。

果たして「倫敦の霧笛」という古風な名前を与えられた謎の正体は？吉村氏のセンスが、きらりと光る。これ以上は語れないが、まずは、本屋へ行って（Amazonに頼むのもよし）買って置いて損はない一冊といえよう。

ただし、長編のような満足感を求めると、肩透かしを食らうのでご用心。あくまで「ワンナイト」を楽しむ本なのだから。

さて、吉村氏の愛読者としては、前作「天井桟敷の貴婦人」にあったような、解決しないオカルト的な謎が、今回もあるのではとおそれたが、今回は、すべての謎は、氷室の手によって、最後に明らかになる。ファンとしては、その点に胸をなでおろした次第である。そうでなければ「眠れない夜」に余計に眠れなくなってしまうということになるわけで。まずは、めでたし、めでたしと思い、眠りについて私であった。★★★

★私の本だな 《吉村達也》 1 1 ***ミステリーか感動か***

★私の本だな 《吉村達也》 1 1 ***ミステリーか感動か***

吉村達也氏の、私を知る上では初めてのハードカバー小説「ゼームス坂から幽霊坂」（双葉社）は、今まで、このコーナーで紹介してきた、いわゆる狭い意味での「ミステリー」ではない、それ故、今回は紹介というより、私個人の感想を書かせていただこうと思う。まだ読んでいない方には、ネタバレらしきところが出てくるかもしれないが、ご容赦いただきたい。

この本は、実際、評価が分かれるのではないかなと思う。最初に私の結論から言うと、1日かけて読んだ後、疲れというか、少し失望を感じた。
まず、この本は、双葉社のミステリーフェアの一冊として刊行された。帯には「ホラーを超えた感動の結末！」とある。私は、今までの吉村氏のホラーが持つ、余韻を残すなんとも言えない怖さを期待した。実際、私は、吉村氏のホラーを全作（2000年当時）読んでいるが、どれも、一回きりで読み直したことがない。推理小説は何度も読み返しているのだが、ホラーは、怖すぎて読み返せないのだ。だが、この本には、そういう恐ろしさがない。自殺した死者の復活ということが、ホラー的な要素なのであるが、それは、本文のなかで、一応科学的に解説されてしまう。それでも、余韻を持ってゾッとさせる結末なら、ホラーと呼べるのだが、結末に「感動」を持ってきてしまったことで、読み終わった後のゾッとさせる余韻は、消えてしまっている。つまり、ホラーと言えないのではないかなと思う。故に、この本が「ミステリーフェア」の一冊に入っていることさえ、疑問を感じる。それから、死者の世界について語られる場面があるが、最近の臨時体験の研究に少し触れている私には、違和感があった。この点は、物語であるから仕方ないとしても、死者の復活が、科学的に説明されていることと対照的で、私には不満だった。そして、これは、本当に個人的な見解になるのだが「愛」についての考えがあまりに違いすぎて、今回、その「愛」というものが中心になっているだけに、素直に感動することが出来なかった。それについては、すでに分かっていたことなのだが・・・

1999年11月11日に、我がサイトを三度も訪れてくださった吉村氏が、掲示板で、次のような書き込みをされている。

しかし、この作品、めぐびよんさんにはちょっと問題作かも？
なぜかといえば、作中で氷室想介が田丸警部相手に結婚論を打つ珍しいシーンがあるのですが、なんと知っていることが、このHPで紹介されている遠藤巨匠（遠藤周作のこと）とまるで逆（笑）。なにも、このHPを見て影響されたのではなく、去年あたりからインタビューやエッセイでしきりに展開している私の持論を、今回氷室想介の口を借りて、また言わせたのですが……。大長編の中でその部分を探し出すのも大変という方のためにダイジェストで申し上げます、
「なぜ日本人はLOVEをいちいち恋と愛にわけるのでしょうか」ってことですね。それって、恋をそまつにしすぎなのでは？みたいなことを氷室が入っております。あはは。
ま、ひとつの考えとしてご笑覧ください。

これは「京都魔界伝説の女」について書かれた文なのだが、吉村氏と私の考えが、あまりに違うのである。

今回の作品は、主人公は、結局、死んでしまった恋人に殉じて死を選ぶのだが、それが、肯定的に書かれている部分が、私には、受け入れられないのだ。愛というものは、生活がともなってこそという考えがあるからだ。確かに、最後に、主人公夫婦が過ごす時間は、感動を呼ぶ。しかし、自殺を美化するような結末には、やっぱり、納得がいかないのだ。
吉村作品の「感動」は、推理小説としてしっかり成り立っている上に、さらにドラマがしっかりと人間を描いているところから生まれる。だが、今回「感動」が先あって、ミステリーとして、また、ホラーとしても成り立っていないと私は思う。願わくば、今後は、このような「感動」が先にある作品より、今までの吉村作品にあったような、二度と読みたくないくらい恐怖を描いたホラー、トリックの面白さと人間ドラマの感動を兼ね備えた推理、そして、何と言っても、その個性的な登場人物の活躍を書いていただきたい。特に止まっている「『吉野の花』殺人事件」の続編（四季の殺人シリーズ）に、朝比奈耕作ファンとしては、大いに期待したいと思う。

★私の本だな 《吉村達也》 1 2 ***幸福と不幸***

★私の本だな 《吉村達也》 1 2 ***幸福と不幸***

長い間、うつ病で読書というものが出来なかった。その間に、吉村氏は沈黙の期間を終えて、「早書きたっちゃん」が復活。私は娘にプレゼントされたりして、新しい本を手に入れながら、読むことが出来なかった。

三人の子どもが全員不登校になり、子どもたちと自分のダイエットの為に子どもたちと一緒に近くの区民プールになって、自分の中に、ほんの少しだが余裕ができるようになった。子ども学校に行かないことで、時間に追われなくなったせいもあるかもしれない。

区民プールが回収の為、一時お休みになったので、長女とショッピングに出かけるようになった。そこで、本屋に立ち寄って見つけたのが「十津川温泉殺人事件」(ジョイ・ノベルス)だった。何故か、今回は「読める」という気がした。そして私は、この本を以前のように、楽しみながら読むことができた。

前置きが長くなったことをお許し願いたい。実は、この本のテーマと自分の今が重なっていて、驚きながらの読書になったことを伝えたかったのだ。

「幸福は絶対。不幸は相対」とこの本の登場人物はいう。そして、そのことに関して、おもしろいことにサッカーW杯を重ねながら重ねながら、殺人は進んで行く。殺人者の心理とW杯を見ていた日本人の心理を見事に描き出して行くのだ。

本当の幸福とは何か。本当に喜ぶべきことは何か。この本は、問いかけている気がする。そして、前向きに生きて幸福を感じる方法を教えてくれる。

私が長い前置きをしたのは、三人の子供達の不登校になったことを「親切に」心配してくださる方が多いからなのだ。「家庭の中が暗いでしょ?」と言われたこともある。だが、我が家には、笑い声が溢れている。子どもたちは学校から解放されてのびのびしているし、私も時間に追われる生活から解放されて、気楽に暮らしている。(私は今の学校制度を否定する気はない)

この本に登場する「平凡な主婦」の平井直子なら、きっと私の家庭をとっても不幸だと思うだろう。彼女は「他人の家庭には当事者しかわからない事情や哲学があるにもかかわらず、自分の物差しを押し付ける人間」だと書かれているからだ。

ネタばらしはしない主義なので、いつものように、私の思ったことだけを書いているが、この本が読めたことは、ただの偶然ではなく、必然だったと感じた私なのだ。

日本と韓国を熱狂させたW杯を絡めて進んで行く構成はおもしろいし、ふんだんに写真が本文の中に使われている温泉殺人シリーズならではの楽しみである旅情もしっかり楽しめる。そして、自分の幸福について考えることもできる。元論、ミステリーとしてドキドキもさせてくれる。ぜひ、御一読いただきたい。こうして読書できたことを感謝しながらお勧めする私なのだ。★★★

★私の本だな 《遠藤周作》 1 ***我らなぜキリスト教徒となりし乎***

★私の本だな 《遠藤周作》 1
我らなぜキリスト教徒となりし乎

この題名をみて、次のページに行こうとおもわれた方、ちょっとガマンして読んでくださいませんか。

「我らなぜキリスト教徒となりし乎」（光文社）というタイトルの本です。なんだってこんなカタ〜イ題名をつけたんでしょうね。内村鑑三の本にあやかった題名なんです。作者は二人で、作家の安岡章太郎さんと、カトリック神父の井上洋治さんです。

本の帯にも「遠藤周作と学び、教えられたこと」とあるように、遠藤さんと深い関わりがあったお二人が、遠藤さんについて語った本です。というか、随所に遠藤さんの分の引用や語録があって、遠藤さんを交えた三人がキリスト教について語った本と言うべきかもしれません。

著者が二人なので対談なんですけど、通常のものとは違い、会話をそのまま記録したかたちではなく、お二人が、それぞれ短い文章で「対話」なさっておられます。まえがきによれば、月に一回、半年くらいかけて続けてきた対話を元に書かれたとあります。題名の割に、文章は平易で、スイスイ読めたのは、私が遠藤ファンだからでしょうか。

内容は多岐にわたっていて、遠藤さんの関心の深かった切支丹時代のことから、キリスト教の教義のこと、現在の問題、オウム真理教や統一協会などにもふれています。

私は、この本を読んでいると、先にも書いたように、まさに遠藤周作さんとの共著というか、彼の人生そのものがバックボーンを担っていると感じました。（遠藤作品や彼の行き方については、今後も様々な形で再評価されていくでしょうね）

しかし、そればかりでなく、もちろん、安岡さんや井上神父も、それぞれ独自の視点でキリスト教を語っておられ、単なる追悼本ではなくなっています。」安岡さんの「韓国にキリスト教徒が多いのは、日本の植民地支配への反発だ」という説は興味深いですし、井上神父が「いまの子どもたちに、人間は神ではないことを教えたい」と強く願っておられる姿も印象的でした。

何だか、本屋で手に取るには、気恥ずかしい題名の本ですが、いま、キリスト教だけでなく、何か宗教的なものを求める気持ちがある方がいらしたら、ぜひ、読んでみてほしい一冊です。★★★

★私の本だな 《遠藤周作》 2 ***幸せな読書***

★私の本だな 《遠藤周作》 2 ***幸せな読書***

遠藤氏の初期の作品で、特に好きなのは「海と毒薬」（各社文庫あり）だ。大学の卒業論文でもこの作品を取り上げたので、とくに思い入れが強い。
この作品の中で語られる、日本人の罪の意識について、「他人に知られなければ罪の意識を感じない」という不気味さを私もずっと持っていた。作中人物の戸田のように罪の意識を得ようと試みて、積極的に悪を行うタイプではなかったが、この作品を読んだ時（初めて読んだのは中学生の頃）「ああ、私もそうだ」と思った。

その後、歳月は流れ、聖書との出会いから20年（執筆当時）を経て、教会に導かれ、受洗し、教会生活をする中で、その意識は少し変化した。「良いことも悪いことも、全て見ておられる神の目がある」ということを実感し始めたことだ。これは、キリスト教教育によって生まれた実感なのか、私自身が年をとったからなのかよくわからないが・・・（その両方だろう）

そんな愛着のある作品なので、こんな愚行のエピソードもある。あるエッセイの中で、遠藤氏は「海と毒薬」の素材となった事件の大学病院に行き、見舞客を装って屋上に上がり、そこから海を眺めた。その時「海と毒薬」という題を思いついたということが書かれていた。それを読んで、私もいつか同じことをしたいとなぜか思っていた。

チャンスは、大学卒業後に巡ってきた。OL時代に、出張でその町に行くことになったのだ。その時、私は雨の中、バスに乗ってその病院へ行き、一番古そうな建物の屋上に見舞客のような顔をして上った。小雨の中、海は遠かった。遠藤氏が見た時からずいぶん年月が経っているので、埋められたのかもしれない。その建物だって、彼が訪ねたのと同じものかわからない。
だが、私は、幸せだった。その時のことは、いまでもよく覚えている。ドキドキした。こんな行為の中で、あの作品は作られたのだと、一人で感動した。

長い間、遠藤周作氏の作品に親しんできた。その中で、わたしは、「作家 遠藤周作」に出会い、対話し、相談し、教えられ、自分の中で交流を続けてきた。
実際には、一度もお会いすることはなかったし、没後、夫人の書かれたものを読むと私のイメージとはずいぶん違う点もあった。

だが、わたしは間違いなく「わたしの遠藤周作」に出会ってきた。教えられてきた。いつの間にか親しい親戚のおじさんのような存在になっていた。
没後、半年ほど、生々しく感じて、著作を読むこともできなかった。世代は違うが、遠藤氏と同じ時間を生きたことがわたしの喜びだ。そして、これからも、残された著作を通じて、様々なことを学び、考えていこう。

一生のうちに、こんな「ライフワーク」とも言えるような作家に出会った私は、本当に幸せな読書をしていると思う。★★★

★私の本だな 《遠藤周作》 3 ***その魅力について***

★私の本だな 《遠藤周作》 3 ***その魅力について***

「遠藤周作さんの魅力はなんですか？」と訊かれたら、私は「文学はもちろんですが、その生き方です」と答えるでしょう。生き方といっても、私が知っているのはご本人がエッセイなどに書いていることだけで、私生活を直接知っているわけではありませんが、そう答えるでしょう。

深いテーマをもった純文学を書く一方で、狐狸庵ものを書いたり、対談集を多く出したり、若い人に人生を語る本を書いたり、恋愛論を書いたり・・・また、書くことだけでなく、素人を集めて劇団を作り海外公演までしてしまったり、音痴の人ばかりのコーラス隊を作ってプロと共演したり、「宇宙棋院」という壮大な名前の囲碁の集まりを作ったり・・・。遠藤さんは、自ら「たくさんのチャンネルを持って生きる」と書かれています。様々な面を持って、様々な人たちと接しながら生きていられました。私は、そこに魅力を感じるのです。

孤独で難しい顔をしている作家像や、「敬虔な」と必ず冠詞のつくクリスチャン像を見事に壊しながら、しかし、一方で、人生の重たい課題を孤独に耐えながら追いつけ、真に敬虔な信仰を持ち、勉強をし続けていった人でした。

私はそこに、貧しい人や疎まれる人々の中へ進んで入って行って、その生活に即した例え話をしながら、神様のことを語って生きられたイエス様の生き方を見るのです。

キリスト教では「隣人を愛せよ」と教えます。では、「隣人とは誰のことでしょうか。たまたま自分のそばにいた人のことでしょうか。そうではなくて、私自身が誰かの隣へ行くことが、それが、「隣人を愛せよ」という言葉の意味だと、私は教会で教えられました。遠藤さんは、みごとにそれを実践した人でした「深い河」を書いた後のインタビュー記事の中で「文体は平易に、構成は凝って書く」ということを書かれています。純文学の作品においてさえ、平易な文章を心がけることで、読者のより近くへと作品を運んでくださったのだと思います。そういう意味では狐狸庵ものなども、若い世代に発信し、読たくなるような作品を書かれたのだと思います。すべての世代に伝道をされていた遠藤さんの姿がここにあります。

「遠藤周作の魅力」を語るならば、純文学作品だけでは語れません。その他の平易な小説やエッセイや対談などを読まれるべきだと思います。ぜひ、まだの方は手にとってみてください。★★★

★私の本だな 《遠藤周作》 4 *** 「沈黙」 結末について ***

★私の本だな 《遠藤周作》 4
*** 「沈黙」 結末について ***

「沈黙」の最後にある「切支丹屋敷役人日記」は、読みにくく、私も、ずっといい加減に読んでいました。しかし、この部分を読まなければ、本当の「沈黙」の本当の最後ではないことがわかり、それに関する遠藤さんの文を参考に重要な部分を教えてもらいたと思います。

「延宝二年甲寅」の最初の項に、
「岡田三右衛門儀、宗門の書物相認め申し候様にと遠江守申付けられ候」とありますが、ここに出てくる「書物」とは、誓約書のことなのだそうです。つまり、棄教の誓約書です。なぜ、一度、踏み絵を踏んで棄教した岡田三右衛門（ロドリゴ）が、ここでもう一度、誓約書を書いているか。それは、彼が、牢に入れられた後で、「やはり、私はキリスト教徒である」と申し出て、再度、拷問にあい、その後、もう一度、棄教の誓約書を書いたということを暗示しているのです。

また、よく読むと、吉次郎（キチジロー）が牢に現れたことも書いてあります。その吉次郎に、宣教したのかと問われたロドリゴが、自分は「勧め（宣教）」はしていないと述べたことも書かれています。それは、吉次郎が自分と関係があると思われる、拷問にかけられると思ってした発言ではないかと思えます。

ロドリゴもキチジローも、同じように、神から離れず、しかし、拷問には耐えられず、大切な神様を棄てますと言ひ、また、やはり捨てられないと戻っていくのです。その苦しみを何度も味わったのです。あの時代でなければ、こんな目にあわず、一生幸せに信仰を持って過ごしたことでしょう。そのことを神様は、よくご存知でした。それゆえに、踏み絵を前にしたとき「踏むがいい」とおっしゃったのだと思えます。

ずるくて弱いキチジローが最後までロドリゴのそばにしようとしたことも、この作品の大きなテーマです。

「沈黙」は、そのタイトルゆえに、神の沈黙を書いた作品だという誤解を受けました。遠藤氏は最初「ひなたの匂い」という題をつけていたそうです。屈辱の日々を送るフェレイラが、あるとき、自分の家のひなたのなかで、腕組みしながら過ぎ去った自分の人生を考える。そういうときの「ひなたの匂い」をイメージしていたそうです。それは、孤独ではあるけど、やはり、神様がそばに感じられると思えます。

「沈黙」は、神の沈黙を書いた作品ではなく「神は沈黙しているのではなく語っている」ということを描いた作品なのです。その神の声は、天が割れて、雷が下るようなものではなく、それぞれの人の人生のなかで、密やかに、しかし、確実に語られているのではないのでしょうか。つまり「日常」（「沈黙」登場人物にとっては異常に過酷なものでしたが）のなかで、心と聞こえるもの、そして、「ひなた」という言葉に含まれるようにあたたかく私たちの耳にも聞こえるのだと思えます。★★★

*参考文献 遠藤周作著「沈黙の声」プレジデント社刊

★私の本だな 《遠藤周作》 5 ***キリスト道***

★私の本だな 《遠藤周作》 5 ***キリスト道***

今回は、遠藤氏の没後に出版された本のなかから「夫婦の一日」（97年 新潮社）を紹介しようと思う。

この本は、80年代に書かれた単行本未収録の純文学短編5作を集めた本だ。遠藤氏は、自らのエッセイで語っているように、長編を書く前に、同じ主題をもった短編をいくつか書くというスタイルをとっていた。代表作のひとつ「死海のほとり」では、事前に発表された短編が、そのまま長編のなかに組み込まれている。そういう視点から見ると、この「夫婦の一日」は、86年に発表された「スキャンダル」と合わせて読むと非常に興味深い。遠藤氏が「敬虔な」といわれる「クリスチャン」の姿に、あえて揺さぶりをかけ、自らの神が、それに耐えうる本物なのかを探ろうとする姿がそこにある。

また、それまでの「罪」という命題から、「悪」という命題へ、一步踏み出そうとしている姿にも出会える。本来、最後の純文学長編となった「深い河」は、「悪」について「スキャンダル」の主題をさらに深める構想を持っていたという。彼の愛読者である私も「スキャンダル」の次回作は、「悪」についてさらに迫った作品になるものと確信していた。しかし、発表された「深い河」は、「スキャンダル」以前の、いわば「遠藤文学」の集大成な作品であった。読後、私は、彼の死を予感した。彼の息子である龍之介氏も、手記のなかで、同じ予感をもったと書いている。神様は、遠藤氏の残された時間をごぞんじだったのだ。

さて、「夫婦の一日」に戻ろう。この作品集のなかで、わたしが惹かれるのは「日本の聖女」という作品だ。これは、細川ガラシャを取り上げ、彼女の言動を外国人修道士が手記に認めるというスタイルを持っている。手記の人物の「なるほど、夫を信じられぬゆえ・・・切支丹の教会に抛りどころを探されて参られましたか」という言葉は、私たちの胸に深く響く。奥方様（細川ガラシャ）は、キリスト教を深く知れば知るほどに夫から離れていく。語り手は言う「奥方は洗礼を受けたいと言われる。この地獄絵を乗り越えるためだけでなく、殿からもっと離れるために、殿を見捨てるために洗礼を受けたいという」

これは、単なる歴史小説ではなく、現代の私たちに、深く問いを投げかけてくる作品だ。信仰を持つということは、俗世から逃れ、自らが清らかな世界にはいるということなのか。キリスト教のうちにも、外にも、そのような思いを持っている人が多い気がする。しかし、イエスの解いたことは何だったのかをもう一度思い起こせば、それは「隣人を愛せよ」という教えであった。他人との関係なくして、キリスト教は成り立たないのではないか。

遠藤氏は、あるエッセイで、キリスト教は、「キリスト教」と呼ぶよりも、「武士道」などと同じように「キリスト道」と呼んだ方がよいという意味のことを書いている。「キリスト道」すなわち、悟りや教えではなく、「生き方」が問題なのだと言ったのだと思う。★★★

★私の本だな 《遠藤周作》 6 ***長崎・外海町を訪ねて***

★私の本だな 《遠藤周作》 6 ***長崎・外海町を訪ねて***

ああ、やっと会えた！さっき、この横を通った時、なぜ気づかなかったんだろう。前方に「沈黙の碑」を見つけた私は、思わず駆け出した。やっと、やっと会えた！しばし、立ちつくす。だが、たまらなくなると、私は碑のそばに近づいた。

人間がこんなに哀しいのに
主よ、海があまりに碧いのです
遠藤周作

刻み込まれた字をこの右手で、一字一字確かめるように触っていく。ざらざらとした石の感覚が右手を通して、心に染み込んでいく。「やっと、ここまで来ましたよ」私は、私の中の「あの人」に語りかけた。やっと・・・

「沈黙」が発表されたのは、1966年。遠藤が43歳の時。世間的には大きな評価を受けながらも遠藤は苦しみの中にいた。カトリック教会が、この本を否定したのだ。多くの教会で神父たちが、この本を禁書として読まぬように、信徒たちに指導したと聞く。病苦を乗り越えて完成させた渾身の作品を自らの信じるカトリック教会に否定された遠藤。その苦しみ、悲しみは、想像することさえ、難しい。

そして、「沈黙」の舞台となった、ここ長崎県の外海（そとめ）町に「沈黙の碑」が建ったのは、1987年。遠藤64歳の年だった。発表から、実に20年以上の年月が経っていた。

私の脳裏には、この碑のそばに立つ遠藤の写真が焼き付いている。その時、彼は何を思ったのだろう。私たちの想像を絶する感慨を抱いたに違いない。いつ、どの本で、その写真を見たのかは、もう定かではない。だが、その日からずっと、いつか、この場所へ行ってみたくて私は思い続けてきた。特に、遠藤がこの世を去ってからは「あそこに行けば会える」という思いで、ずっと、ずっと、私の心の奥深くに刻み込まれていた願いだった。

碑文に刻み込まれている海の「碧さ」、それを実感させてくれるところに、この碑は建っていた。「沈黙」の執筆のためにこの土地を訪ねたときにも、この海は、このままの「碧さ」で遠藤の目に映ったに違いない。ここへ来なければ、この「碧さ」はわからない。それを思うと胸がいっぱいになった。「きっとまた来ます」と誓った。（この一方的な約束は後年実現した）

碑から少し離れた場所に、今年（2000年）5月に開館したばかりの「遠藤周作文学館」があった。「沈黙」の自筆草稿や母の形見だったマリア像など、そこに展示されている遺品も去ることながら、ここで私が一番感動したのは、テラスから見える、やはり「碧い」海だった。天候に恵まれ、水平線の彼方まで見える碧い海。それだけを見ただけでも、ここにきた価値はあった。

心とテラスの一角に、案内板を見つけた。さして目立たぬ案内板は、海の方を向いており、周辺の島々の名などが、書き込まれている。そして、よく見ると、水平線をさして左右に、二つの小さな三角形が刻まれていた。右の三角形の下には「フランス」の文字、左の三角形の下には「ポルトガル」の文字。そのとき、私は聞いた。「この海をずっといくと、留学したフランスや。あの海の向こうのポルトガルから宣教者たちは来たんや」他の誰にも見えぬであろう遠藤の姿があった。「しんどかったで」彼は語った。「外国の服を、和服に仕立て直すのはなあ」

私が、キリスト教主義の中学に入学したとき、強制的に渡された聖書。それから20年、教会に導かれるまでの間、聖書は何度もほこりをかぶったが、遠藤の著書は、ことあるごとに私の手の中にあっただ。私にとって遠藤は、神のことを教えてくれるイエスだった。そして、もっとも深いところにいる「身内」でもあった。悩むたびに、遠藤の本を開いた日々・・・。

文学館のノートの前で、私はペンを取った。「神様にゆるされて、やっとあなたに会いに来ました。」★★★

★私の本だな 《遠藤周作》番外編 ***めぐぴよんのドタバタ紀行・長崎・外海町***

★私の本だな 《遠藤周作》番外編 ***めぐぴよんのドタバタ紀行・長崎・外海町***

ネットのJさんから、ある日、メールを受け取った「長崎の遠藤周作を訪ねるバスツアーに参加しませんか」それは、Jさんの所属する福岡の教会のツアーだった。私は飛びついた！こんな機会は滅多にない！絶対行きたい！

福岡の教会に9時集合。ネットで、広島から間に合う新幹線を探す。あった！早朝6時発、始発の博多行き、これを逃せば6時48分まで便はない。

前日、もうすでに舞い上がっている私。夕食の支度をしながら、いつものように子どもたちに声をかけた「お風呂のお湯見てきて」長女が走っていく。「あ～！」叫び声「お母さんお風呂の栓してないじゃん！」とんだ大失敗！「いかん、いかん、落ち着かなければ・・・」と自分に言い聞かす。「ごめ～ん」

いよいよ当日の朝、5時前に起きて、身支度をし、駅まで送ってくれるという夫にコーヒーを入れる感謝！感謝！私はなんて幸せ者！（という割には離婚してしまったが）夫の車に乗って出発。子ども達はまだ夢のなか。メモを残しておく。お昼前には母がきてくれる手はずになっている。

この時間なら、駅まで楽勝のはずだったが、なぜか、ことごとく信号に引っかかる。「ギリギリかな？」「とりあえず、入場券を買って乗り込めば大丈夫だよ」夫が教えてくれる。何しろ旅慣れていない私。出張の多い夫の言葉は頼りになる。私は、新幹線の時刻表を眺めながら、「いざとなったら、次の便でもなんとかなるよ」と言ってみるが気が気でない。

駅に着いたのは、6時3分前。「ありがと！」車のドアをボタンと閉めて、改札へ走る。入場券をかって、改札の上の掲示板でホームを確かめる。「6時発、これだな」ホームの階段を駆け上がる。もう、発車前のベルが鳴っている。「しまった、あっちのエスカレーターを駆け上がればよかった」と思いながら、日頃の運動不足のせいでコケそうになりながら、ひたすら階段をかける。見えた。まだ、ドアは開いている。「間に合うぞ」その時、私の意味にアナウンスが聞こえてきた「広島発6時、東京行きが発車いたします」ホームを間違えたのだ。私はへなへなとへたり込んでしまった。

自分のアホさ加減に嫌気がさしながら、ノロノロと階段を降りる。博多で、ゆっくりとモーニングを食べて、教会へ向かう予定だったが、仕方ない。売店でサンドイッチとコーヒーを買って、待合の椅子に座る。すると、夫の姿が見えた。心配して見に来てくれたのだ。「間に合わなかったんか」同情の表現が「ホームを間違えた」といったとたん、あきれ顔に変わった。

わびしく朝食を済ませ、時間を潰して、やっと新幹線に乗り込む。博多駅は、独身時代に一度行ったきり。そこから地下鉄に乗らなければならないのだが、大丈夫だろうか。すっかり自信を失って、不安でいっぱい私。

博多に着くと、新幹線を飛び降り、まず、Jさんに遅れたことを電話。そして、地下鉄乗り場を目指して、駆け足で急ぐ。ついた。これだ。ホームに止まっている電車に飛び込むと同時に発車。駅名と路線図を車内で見比べる。今度は間違っていない。ほっ。

こうして、Jさんと会い、長崎へ出発した。今回のツアー、私のなかでの最大の目的は「文学館」よりも「沈黙の碑」にあった。その碑を見つけるやいなや、私は走り出し、しゃがみこんで、碑文を撫で回した。ほとんど異常者である。昼食後、もう一度そばを通った時も、また駆け出して「遠藤周作」と刻まれた部分を撫で回しながら「絶対もう一度来ます」と声に出して碑に誓った。同行の人たちの中で、そんな愚行をする人はもちろん一人もいない。「しっかり触って帰りなさい」笑いながら声がかかった。

夕方、お天気にも恵まれ、大満足で旅を終え、バスは予定どおり教会前に戻ってきた。まっすぐ行けば、すぐに地下鉄の入り口がある便利な場所だ。皆さんにお礼を言って「ここをまっすぐですよ」とJさんに確かめた時、どうも、私の目に不安を感じ取ったらしい優しいJさんが「じゃあ、そこまで」とついて来てくださる。感謝！「もう大丈夫です」自信たっぷりに言って、Jさんと分かれた。

舞い上がった心のまま、しかし、行きと同じ路線に乗るだけだからと安心した気分で地下鉄の切符を買う。「博多方面」というホームに立つと電車が来た。乗ろうとすると、年上の女性に「これ、博多にとまりますか」と声をかけられた。「はい、私も博多に行くんです」ところが、途中から変なことに気がついた。来た時には見たこともない駅名が次々と現れる。席を立って路線図を見ると、なんと別方向に向かう電車ではないか！気がついた途端、ドアが開いた。思わず電車から飛び降りる。すると、さっき声をかけていた女性も立っていた。「すみません」その方も他の人に聞いて、気がついて電車を降りたという。

ここから引き返して、電車を乗り換えなければならない。また、ドジってしまった。今度は、その女の人にぴったりくっついてホームを移動する。そして、なんとか二人で博多駅についた。

お礼とお詫びを言って別れ、JRの駅へ向かう。電車の中で調べたら、丁度いい新幹線があった。これを逃すと30分くらい駅で待たなければならない。

ところが、博多駅に着くと、すごい人！やっと切符を買ったのが発車5分前。「ホームはどこだ！」もうお土産なんか買う暇がない。早足で、ホームへたどり着き、ギリギリセーフ。一番近いドアから乗り込むと、すぐにドアが閉まった。

やっと一息。これで広島に帰れる。とにかく早く家に帰って、靴を脱いで足を投げ出したい。しばし、幸せな気分を取り戻して、座席に身を沈めた。

ところが、広島駅についても、私の駆け足は終わらなかった。市内の最寄の駅までの在来線ホームは、新幹線から一番遠い。乗り換え時間は3分。こうなったら、意地でも乗るぞ！またもギリギリセーフで飛び乗った。

最寄駅からタクシーに乗って、やっと帰宅。すると、夫も仕事から帰ったばかりで、私の顔を見るなり、朝のドジを繰り返し笑われる。むかむか！子どもはまだ、お風呂に入っていない。主婦の外出ってこんなもんよね。座る暇もなく風呂場に行こうとしたら、長女の声が飛んだ「お母さん、栓をしてお湯を入れてよ！」★★★

★私の本だな 《遠藤周作》 7 *** 幻の「ヨブ記」 ***

★私の本だな 《遠藤周作》 7 *** 幻の「ヨブ記」 ***

あるきっかけで、旧約聖書の「ヨブ記」を読んだ。

生涯「病気のデパート」と自らを呼んだほど、次々と病気に苦しめられながらも、明るく生きようとした遠藤の晩年は、死後、出版された順子夫人の手記によると、壮絶な闘病生活だった。その中で、遠藤は「ヨブ記を書きたい」と言っていたという。

「ヨブ記」は、人徳も高く、神からも「無垢な正しい人」と認められていたヨブが、サタンの苦しみを受ける物語だ。しかも、サタンは、神にヨブの信仰を試すことを提案し、神はそれを承諾する。ヨブは、神とサタンとの承諾のもとに、何の理由もなく、突然に、財産を奪われ、不幸な身になり、自らの体も、重い皮膚病にかかってしまう。全く不当に見える物語だ。

「ヨブ記」は、一体何を伝えようとする書なんだろうか。なぜ、神はサタンの申し出を受け入れたのだろうか。遠藤は、どんな「ヨブ記」を書きたかったのだろうか。

まず、確実なことは、遠藤の「ヨブ記」の主人公は、聖書のヨブと違って、もっと普通の、いやもしかしたら、それ以下の、特に人徳もなく、弱い人物であっただろうということである。なぜなら、彼の小説の視点は、常に弱者であり、それは、イエスが、弱者に対して偏愛に等しいくらいに近づいて行ったのと同じだからである。友人が見舞いに来た後に、「なぜ、自分だけが」と病身の身を嘆いて号泣したという遠藤。彼が生きていれば、その作品の視点は、永遠に、弱者にあったと言っても、異論はないのではないか。

私は、聖書学者でも、牧師でもないのに、その点を踏まえて読んでいただきたいのだが、私は「ヨブ記」は「神の一方的な人間への信頼を語る物語」だと思う。

神の人間への試練は、一方的だ。「おまえにならできる」とこちらの都合など御構いなしに、一方的な信頼のもと、私たちは試練を受ける。しかし、神は、私たちに必ずしも強くなることを求めて試練を課すわけではない。」向上心は必要だが、今のまま、弱いままの私たちに信頼をおき、試練を課すのだ。そして、それは、決して、逃げられない試練、失敗の許されない試練ではない。私たちがその試練に耐えられないと逃げ場を求めるとき、そこには、周りの支援や隠れ場が用意されている。耐えられぬ私たちを、神は許し、失敗して、あるいは苦しんで、神を呪うときでさえ、神は何度も、私たちは許して下さるのだ。

ヨブは、試練にあい、「なぜなのか」と神に訴え続けた。その苦しさゆえに、産まれない方が良かったとさえ叫んだ。だが、その叫びも、神に向けられた祈りであった。ヨブは最後まで、神との関係を絶たなかった。

神は、ヨブがどんな試練を受けても自分から離れないだろう、という大きな信頼を持っていたからこそ、サタンの申し出を受け入れたのではないだろうか。その一方的な信頼。ひとりひとりを知り尽くしているからこそその信頼！には「もう勘弁してくれ」というような一方的な信頼こそが、神の限りなく大きな愛なのだと思う。

何度でも赦し、また信頼を持って試練を課す神の愛。「ヨブ記」では、それを強調するために、ヨブがまず、正しい立派な人物であったことが記されているが、この愛は、決して、立派な人物だけに向けられたものではない。私たちすべてに向けられているのだ。

遠藤は、苦しみの中で、きっと「弱者のヨブ」を考えていたに違いない。弱虫で、試練から逃げ回り、卑屈なこともするヨブ。一方的な神の信頼に苦痛を感じるヨブ。何度も逃げ出し、その度に赦されるヨブ。それでも、神を忘れられない、無視できない・・・私のようなヨブ。

私は、そんなヨブを遠藤に書いて欲しかった。そんなヨブがどのような生涯を送るのか、遠藤に書いて、教えて欲しかった。

「ヨブ記」の結末は、ヨブがサタンから解放され、以前にも増して幸せになるところで終わっている。しかし、これは、後世に書き足されたものだと言われている。私もそう思っている。

私たちの人生は、そんな風には終わらない。一生涯、神の一方的な信頼を受け、試練を受け続けるのではないだろうか。そして、その中で、弱さゆえに赦される体験を通じて、神の愛の限りない大きさ、深さを知らされていくのだと思う。★★★

★風の吹くまま ***風と神様***

★風の吹くまま ***風と神様***

「風」は目に見えない。しかし、確かにある。木々の揺らぎや肌の感覚などで、私は「風」を感じる。目に見えないけれど、確かに存在するのだ。

神様も同じようなものじゃないだろうか。目には見えない。だけど、振り返った時「あの時こうしなかったら」とか「あの時あの人と出会わなかったら」とか、自分が自分以外の力で方向を変えさせられている時があることに気づく。ふつう、それは「偶然」と呼ばれるけど、私は「神の働き」と感じる。この「働き」そのものが、神様なんじゃないだろうか。神と呼ぶのに抵抗があれば、他の名前でもいい。例えば、宇宙の働きとか、太陽とか、Xとか、タマネギやトマトだっていい。何かが働いているのだ。

「それならば」と質問する声が聞こえて来る。「神が存在するなら、なぜ世界中には悪いことや悲惨なことがたくさんあるのか」と。

私のような未熟な人間は、うまくそれに答えられない。ただ、神様は人間を意のままに操られる操り人形のように作られなかった。神を信じない自由、神に背く自由をも与えられたのだと教えられたことがある。（だからと言って、病気の人が神に背いているわけではない。）

遠藤周作の「私が・棄てた・女」に出てくるミツという純粋な女性は、子供が病気で苦しんでいるのを放っておく神様なんか信じられないという。その思いもまた、よくわかる。

教会では、よく「神様の御計画は人間には見えない」と言われる。長い長い歴史の中の点にすぎない私たちに、神様の雄大な御計画は見えないのだと。

苦しい思いやイヤな体験をした後、ずっと後になって「あの体験がなかったら、今の私はいない」と思うことがある。それくらいのスケールだったら、私にも、この「神様の御計画」というのも少しわかる気がする。

「結局、神様について、お前はどれだけ分かっているのか」と問われると、私は口ごもってしまう。「ただ、時々、背中を押す風のように神様を感じることもあるのだ」としか言えない。そして、その風に素直に背中を押されて、しなやかにしなりながら生きていけたらと願っているのだ。★★★

★風の吹くまま ***「私の祈り」***

★風の吹くまま ***「私の祈り」***

私の祈り

風が吹いた。
流されまいとして しゃがみこんだら、つらかった。
向かっていこうとしたら 目が痛くて 涙が出た。
くるりと反対を向いたら
背中を押されて 歩き出せた。
神様、いつも風をください。

この祈りは、私自身の強烈な体験をもとにして書いた。
「風が吹いた」とは、その出来事が起こったことを示している。神様から与えられた試練だった。
最初、私は、そんなことに動じるもんかとしゃがみこんで、平気な顔をしてやり過ごしてやろうと思った。でも、足はガクガクするし、心は悲しみと不安でいっぱいになって、つらかった。

次に、私は、神様に向かって行った「なぜ、こんなことをなさるのですか」となんども叫び祈った。涙が止めどなく溢れた。

でも、神様は何も答えてくれなかった。答えていたのかもしれないけど、私にはわからなかった。ただただ、私は泣いた。

最後に、涙も枯れ果てて、私は、神様に言った「もう、どうにでもしてください！あなたのお好きなように」それは、「身を委ねた」という立派なものではなかった。ふてくされて、背中を向けて、神様の前に大の字に転がった。

そうしたら、不思議なことにあんなに強く冷たく感じられていた風が、柔らかな春の風のようになって、私の背中を優しく押した。「こっちへ行ってごらん」と。

また、次に「風が吹くとき」私は愚かにも同じようなことを繰り返すだろう。反抗し、向かって行き、叫びたてて、力尽きて倒れるだろう。それでも、私は祈らずにいられない。「神様、いつも風をください」と。★★★

★風の吹くまま ***母の首筋***

★風の吹くまま ***母の首筋***

小さい頃、夕方、夜の仕事に出かける母が化粧をしている姿を見つめていた記憶がある。
「めぐちゃん、お化粧水はね、顔だけじゃなくて、首にも塗ったほうがいいんよ。」
「長い間、つけとるのと、つけてないのでは、何十年も経ったら違いが出てくるんよ。」
「ふ～ん」

まだ小さくて化粧などしない私に、母は、そう話しかけながら、鏡に向かっていた。

その頃の母の首筋は、確かに同じ年頃の人に比べて、美しかった。洋服も、胸元が開いたデザインが多かった。それが、美しく、よく似合っていた。決して水商売っぽい服装ではない、上品な美しさだった。

「これ、着ん？（着ない）」
「どうして着んのん？よお似おうとったじゃないの」
母は、少し寂しそうに答えた。
「首をあんまり出したら、歳が出るけえねえ」
そういえば、最近、襟のついた服ばかり着るようになってきていることに、ふと気がついた。首筋に、遠慮がちに目をやると、そこには、同世代の人よりは少ないと思うが、たしかかな年輪が刻まれていた。
試着してみると、母の服は私にピッタリだった。
「ありがとう」

誕生日に選んだ、明るい色のポロシャツと交換に、私はその胸元が開いたTシャツを受け取った。★★★

★風の吹くまま ***自分の姿***

★風の吹くまま ***自分の姿***

先日、友人から私が写っているスナップ写真もらった。見た瞬間「ガーン！私ってこんなに太っているの？」かなりのショックだった。（もちろん、痩せているとおもってたわけじゃない。でも、こんなには思わなかった・・・）

大抵の人は、毎日鏡に向かって自分の顔や姿を見ているだろう。私でもそうだ。洗面所には、もちろん鏡があるし、玄関には、全身映るものも置いている。だが、自分を鏡の中に見たとき、どのくらい真実を見ているのだろうか？私みたいに、どこか楽道家だと「うん、よし！」と適当に及第点を出してしまう。というより、目では、鏡に映った姿を見ながら、頭の中では、自分好みに修正される像が結ばれているらしい。だから、全く客観的に自分を映す写真を見たとき、ショックを受けてしまったのだ。

姿形だけでなく、自分を素直に、ありのままに見つめることは、難しい。私など、つつい甘く点を付けて、「まあまあ、いいヤツだよな」などと思ってしまう。他人に感謝されることがあるものなら、態度には出さなくても、内心、鼻高々である。

「人間は、自分の顔を一生みることはできない」というのは、よく言われることだ。鏡に映った裏返った自分しか見られない。ましてや、自分の背中となると、とても見ることはできない。自分自身なのに・・・。

そこで、他人の目を通した自分を気にするようになる。「こんな服装で、変に思われなかなあ」「こんなこと言っ、いやなヤツと思われなかなあ」「こんな態度とっていいのかなあ」・・・気にし始めるとキリがない。そして、下手をすると、その「他人の目に映る自分」に振り回されて、ヘトヘトになってしまう。よく見られるように、必死になってしまうのだ。

でも、神様という存在は、すべてご存知だ。爪先立って大きく見せても、本当の大きさなどお見通し、いい子ぶって演技しても、すべてバレてしまう。私たちの髪の毛の数さえご存知だという。そのことを考えると、少し気が楽になる。本当は、いやなヤツで、イジワルなことも思いついたり、サボることばかり考えている自分を、どう取り繕っても、お見通しの目があるのだ。そして、その神様は、そんな私を「そのまま」受け入れてくださっているのだ。私自身も、ありのままの自分を素直に受け入れられたらいいなと思う。神様が「それでよし」と受け入れてくださっているのだから、何も怖がることはないはずだ。でも、今日も、鏡の中に、ありのままの自分を見つめられない私がいる。★★★

★風の吹くまま ***痛みの共感***

★風の吹くまま ***痛みの共感***

小指に小さな傷を負った。大したことはないが、ちょうど薬指にあたる場所なので、チクチクと結構痛い。「痛いなあ」となんどもボヤいていたら、娘が「痛いでしょ、お母さん。指ってよく使うから痛いんだよね～」と言ってくれた。痛みをわかってくれたことが、とても嬉しかった。彼女もきっと、同じような経験があり、それを思い出したのだろう。

かつて、遠藤周作のエッセイで、こんな話を読んだ。入院中に、手術の痛みを耐えかねて、唸り声を上げる患者がいた。遠藤は、看護婦さんに、「あんな時は、どうするのか」と尋ねると「手を握ってあげるのです」と答えた。そんなことで痛みが和らぐはずはないと思った遠藤だったが、自らが手術を受けた後に、手を握ってもらうと、不思議と痛みが和らいだと言っていた。

遠藤は、手を握るという行為で、痛みを理解してもらい、孤独から解放されたのだと語る。人間にとって、最大の痛みは、孤独なのかもしれない。

ダウン症の子供を持つ友人がいる。彼女は言う「私は、障がいを持つ子の親の気持ちはわかるけど、障がいを持つ子本人の気持ちはわからない」何て素直な告白だろう。親子の間であっても、自分の痛みでない相手の痛みを理解することは、難しい。

いじめられた子を持つ親は、いじめられた子を持った痛みはわかって、いじめられた子本人の痛みはわからない。私のような不登校の子を持つ親は、不登校の子を持つ親の苦しみはわかって、不登校の子本人の苦しみは、わからない。結局、自分以外の人の痛みや苦しみをわかることは、私たちにはできない。たとえ、似たような経験があっても完全にわかることなどできない。

だが、わかろうとすることは、できるのではないだろうか。かつて、自分が受けた痛みを思い起こし、相手の気持ちに重なるように想像力を働かせ、なんとかわかろうとすること、そういう努力をする余地はあるはずだ。

その努力が、相手に伝わって、自分の痛みや苦しみをわかってくれようとしている人がいるという事実が、その人を孤独から救う。それは、体の痛みでも、心の痛みでも同じだ。こんな風に、相手の痛みや苦しみに共感出来る人になりたいと思う。とてもむづかしいことだけど・・・★★★

★風の吹くまま ***念仏とアーメン***

★風の吹くまま ***念仏とアーメン***

(2000年)1月23日、国民的アイドルだった、国内最高齢者の双子姉妹「きんさん、ぎんさん」の姉のきんさんが亡くなりました。107歳の大往生であった。亡くなる前、寝室から念仏を唱える声がし、しばらくして家族が入ってみた時には、すでに冷たくなっていたと新聞は報じていた。姉の訃報を聞いたぎんさんは、がっくりして頭から布団をかぶり「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と手を合わせたという。

念仏を唱えていた時、きんさんの意識がどの程度あったのかは、わからない。だが、念仏を唱えながら、死の世界へ入っていかれたということは、意識してというより、むしろ、無意識の中で念仏が口をついて出たのではないかと私は思った。

きんさん、ぎんさんにとって、念仏は血肉化されたものであったのだろう。「信仰」というよりも「信心」という言葉が似合う気がする。お二人が、仏教に関してどのように接してこられたかは、わからないが、親の代からの自然な生活の中の姿として、念仏を唱えて生きてこられたのだろう。念仏を唱えながら、還るべきところへ還っていかれたという感が強い。

この訃報に接する前夜、私は、遠藤周作の「人生の同伴者」という本を読んでいた。その夜、私が読んだ箇所には、正宗白鳥のことが触れられていた。残念ながら、私は白鳥について全く知識がないのだが、ここで語られていたのは、キリスト教を捨てたはずの白鳥が、死の床で「アーメン」と言ったという問題についてであった。

きんさんの念仏と白鳥のアーメン。それが同時に私の前に提示されたことは、単なる偶然なのだろうか。私は、人の無意識に働きかけるものについて、考えざるを得ない心境になった。

今、私は洗礼を受け、教会の一員となったクリスチャンだ。だが、そのキリスト教は本当に「私のもの」になっているのだろうか。私の無意識の中まで深く入り込んでいるのだろうか。もし、今、死の床についたなら、私の口は最後に何を語るのだろうか。なんども問うてみたが、確信のある答えは出て来ない。私の無意識になるものは「主よ」と語るのか。それとも、小さな頃に教えられた「南無阿弥陀仏」なのか。

考えているうちに、ふと思った。無意識の中など、そんなに簡単に覗き込めるものではない。任せておけばいいのではないかと。

今の私の意識は、キリスト教の神を信じている。だが、もし、死の床について、無意識の中から出た言葉が、念仏であって、神が仏にすり替わったとしても、それは、私自身がどうこうできるものではないのだ。そして、もし念仏を唱えても、私がクリスチャンとして生きて来た人生を否定することでもないのだ。私が人生のなかで、仏よりも神に多く出会ったというだけで、還っていく所は、一つなのではないか。

神に呼ばれ、招かれ、私はこの世でクリスチャンになった。私の無意識の奥に、仏教の念仏があったとしても、神は、それを承知で、そんな私を丸ごと受け入れ、愛してくださったのだ。★★★

★風の吹くまま ***弱い者だからこそ***

★風の吹くまま ***弱い者だからこそ***

洗礼を受けた時、故遠藤周作さんとともに、戦後初のフランス留学生となられた井上洋治神父（故人）と神父とともに「風（プネウマ）」という機関誌を発行されている、遠藤文学の研究者でもある山根道公さんから、聖句のカードをいただいた。

「あなたが弱い者だからこそ 私の力はあなたの中で、十分に発揮されるのだ」と主は言われた。
コリントの信徒への手紙二 12章9節

私が使っている聖書と多少訳が違う。カトリックの方にはこのような訳の聖書があるのか、井上神父ご自身が訳された者か、私は知らない。
だが、私は、何度、この言葉に救われただろうか。

人間は、歯の痛み一つでも、正常にものが考えられなくなるという意味のことを読んだのは、曾根綾子さんの著書だったと思う。事実、人間は、ちょっとした痛みでも、動して、平常心を失ってしまう。それが心の痛みならなおさらである。

「私は、弱い者だ」そう、心が痛くなる程感じるとき、それは、まるで、絶望の淵に立たされているような気持ちになる。
ところがこの聖句は、「あなたが弱い者だからこそ、私の力はあなたの中で、十分に発揮されるのだ」と語りかける。私が立派で、強い者でなく、弱い者だからこそ、主の力が発揮される「うつわ」となれると、絶望の淵から呼び戻してくれるのだ。
主の力は、弱い私の周りで発揮されるのではない、「私の中で」発揮されるのだ。

遠い空のかなたにではなく、自分のうちに主がいてくださることを信じて生きていきたい。★★★

★風の吹くまま ***葬式の準備***

★風の吹くまま ***葬式の準備***

現在、遺書をすでに書いている方、いらっしゃいますか。

私は、1992年に、自分の最期に関する希望、死後の処置に関する希望などを書き記してノートに残しています。縁起でもないという方もいらっしゃるでしょうが、私自身は、祖父母と父の葬儀の際、故人の意思がわからず、とても困った経験があるので、こういうことを始めました。その後、洗礼を受けたので自分の母教会で葬儀をしてほしいということと、「臓器提供意思表示カード」を持つようになったことを追記しています。本文には、延命処置をしないでほしいことや、香典や御花料を受け取らないでほしいなど、いろいろ書いています。

香典については、いつも思うのですが、葬儀というのは祝事と違って予定が立たず、急にやってくるので、家計に大きな負担をもたらすものだという気がするのです。もともとは、死者を出した家を助けるという意味があるのですが、今は、たいていの場合、生命保険などに入っているし、なくてもいいのではないかと思うのです。おかしな提案かもしれませんが、私は、少しの花と参列された方への簡単なおもてなしのために、家計を圧迫しない程度の少額をいただいたらいいのではないかと思います。これだと「どのくらいつつめばいいのか」などと悩まずに済みます。また、遺族も香典返しなどに煩わされずすみます。

私の考えに影響を与えたのは、実際に身内の死に接したことと、その中で読んだ「旅立ちの朝に」（新潮文庫）という本です。これは、「死学」で有名なアルフォンス・デーケン氏と小説家の曾野綾子さんの共著です。この中で、お二人は往復書簡のかたちで、実にさわやかに、あけっぴろげに、死について語っておられます。

「死を考えることは生を考えること」とよく言われますが、実際は、なかなかゆっくり考えたり、遺書を書いてみるころまではいかないものです。でも、私は先日、三十代で亡くなった後輩の葬式に行ってきました。死を考えるのに「早すぎる」ということはないのだと改めて強く感じたのでした。★★★

追記) 現在(2015年)は、葬儀をしない「直葬」をしている業者があるのを知って、「直葬」にするようにと、子どもたちにも伝えていきます。

★風の吹くまま ***お風呂でお祈り***

★風の吹くまま ***お風呂でお祈り***

いつの頃からか、1日の終わりの祈りを、お風呂の中でするようになった。子どもたちが小さかった頃は、一緒に入って、お風呂からお風呂上がりは戦場だったが、今は、1日の仕事を終え、就寝前に入浴する。お風呂につきながら、その日一日のことをいろいろ考えていると、自然とお祈りをするようになっていった。

うちのお風呂は、一人用の小さなお風呂なので、風呂桶のなかでは、足を折り曲げて浸かる。ちょうど膝を抱えるような形だ。そうして、いろんなことに思いを巡らせていると、ある日「これは、子宮の中みたいだな」と思った。心地よい湯に包まれて、ちょうど胎児のような姿勢でいるのが、子宮を連想させたのだ。そのせいで、安心して、お祈りをするようになったのだろうか。

生まれたままの姿になって、湯に浸かり、膝を抱えていると、気持ちまでほぐれていくような気がする。昼間は頑なだった心も、ほんの少し柔らかくなっていく気がする。

そんな中で、自然と手を組み合わせて「神様」と呼びかけると、ただそれだけで、涙が溢れる日もある。

実は、以前、うつ状態が悪く、自殺願望が激しかった時期がある。その頃は、もし、天使がやってきて、何か一つ望みを叶えてくれると言ったら「今すぐに痛くないように死なせてください」というだろうと考えたりしていた。そんな状態だから、祈りと言っても、一日の感謝をすることもできず「なぜ、早く望みを叶えて死なせてくださらないのですか。明日も一日生かしておられるのですか」とばかり祈っていた。もちろん、明日や未来のことを祈ることも、他の人のことも祈ることができなかった。ただ「神様、神様・・・」と何度もつぶやいて、泣いてばかりいた。そんな時、お風呂の中で祈るのは便利だ。さっと顔を洗って、立ち上がり、気持ちをなんとか切り替えて、家族のところへ戻っていきける。

そんなことがあってから「今日一日、ありがとうございます」と心から感謝の祈りができることが、どんなに貴重なことか、知らされた。今は、感謝の祈りができるということを感謝している。

あたたかな神様の愛に包まれて、その体温を体で感じながら、何一つ着飾らない姿で祈る。心が、温かくやわらなくなって、自分のことばかりでなく、周りの人たちのこと、まだ見知らぬ隣人のことにも、思いをはせることができるようになった。そして、この頃は、どんな願いにも、こう付け加えるようになった「あなたのみ旨のままに」

自分の病気の回復を祈っても、悪化することもあり、叶えられない中で、全ては、神様のみ旨に沿って叶えられるのだと、教えられ、ほんの少し分かってきた気がする。もちろん、一秒でも早く、癒されたい。だが、きっと私の病が癒される「時」がまだ来ていないのだと思う。そして、この病気が、私にはまだ必要で、それが終われば、きっと癒される「時」がやってくると信じたい。そう考えていると、自然に「あなたのみ旨のままに」という言葉が、祈りの中に出てくるようになった。・・・いや、出てくるようにしていただいた、この頃の私なのだ。★★★

★風の吹くまま ***私の「マルタ物語」***

★風の吹くまま ***私の「マルタ物語」***

聖書の中のお話を読んで、私が勝手に想像したことを書いてみました。難しい話ではないので、キリスト教に関心のない方も、ぜひ、読んでみてください。

《聖書》

一行が歩いていくうちに、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に向かい入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足元に座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのために、忙しく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、私の姉妹は、私だけにもてなしをさせていますが、なんともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだのだ。それを取り上げてはならない。」（ルカによる福音書10章8節～42節）

若い頃、私は、このマルタという女性は嫌な女だと思っていた。私自身はマリアなのだと、どこか思い上がっていたのかもしれない。イエスに訴えるマルタを、とても疎ましく思い、また、イエスもマルタを叱られたのだと受け取っていた。

だが、歳月を重ねた今は、違う。私は、マルタの悲しみを思う。マルタは、師であり、大切な客であるイエスとその一行のことを、必死に思って立ち働いていたのだ。「マリアのようにできたら、どんなにいいか」と心の

中で、思いながら・・・。マルタは、この家の主婦である。お客が来ているのに、何のもてなしもせずにいることのできない女なのだ。彼女はどうしても、飲み物を飲み干す者がいれば、立ってお代わりを用意しなければと思ってしまいます。食事時になれば、何か食べる者をと台所に駆け込んでしまう。そんなことに、心を奪われなければ、どんなにいいかと、彼女自身思っていたのではないだろうか。

彼女も、マルタのように、イエスの話をそばで聞いていたかった。話をするイエスのまなざしや、その口調、熱意を、本当は眩しく思い、尊敬し、大好きだったに違いない。だからこそ、心を尽くしてもてなしをしていたのだ。だが、本当のところ、イエスの話の本質をズバリわかるマリアと違い、マルタには、その話がよくわからなかったのかもしれない。何を質問すればいいのか。その話を聞いてどうすればいいのか・・・。

イエスは、マルタの訴えを聞いた後どうされたのだろうか。イエスは、内心、マルタの接待を喜ばれていた。しかし、それに心を奪われず、大事なことを伝えたいと思っておられた。イエスは、こう言われただろう。「マルタ、ありがとう。お前の心遣いはよくわかっているよ。でも、今は少し心を落ち着かせて、ここにおすわり。ここに来て、私の方を向いてごらん」と。きっと、マルタは「でも・・・」と口ごもっただろう。だが、彼女も本当は、そばに行き、イエスの声を聞きたかった。イエスは、マルタのその思いをよく知っておられて、彼女をそばに座らせたに違いない。「もう、充分だよ、ありがとう。さあ、今度は私の話をお聞き」と。

イエスの死を知った時、マルタとマリアはどうしたのだろうかと思ってしまう。マリアは、全身に悲しみをみなぎらせ、泣いて過ごしたに違いない。まっすぐにイエスのそばに行き、その足元に座って話を聞き、熱意を持ったマリアは、すべての日常を投げ打って、泣き暮らし、泣き尽くしただろう。そして、彼女は、その中から何かを掴み、立ち上がり、家から出て行く。きっと、復活のイエスに出会った弟子たちのことを知ったのだろう。そして、すぐ、何かの行動を起こしたに違いない。マリアはそれができる女なのだから。

マルタは、悲しみをこらえて、黙々と、日々の生活を送ったのだろう。水汲みや洗濯、炊事、掃除、そして、マルタの家を頼ってやってくるイエスの弟子たちの世話・・・。そんな日常の合間に、空を見上げ、イエスがいないことを思い、涙をこぼしても、涙を手ぬぐいでふき、また、仕事を続けたに違いない。夜の闇の中で、こらえきれずに泣き明かした翌朝も、彼女は、いつものように働いただろう。「マリアは泣き暮らしている。私がしっかりしなくては・・・」と自分に言い聞かせて。やがて、マリアは立ち上がり、家を出て行く。だが、マルタのような女は、日常を続けることが、自分にできることなのだ。

イエスは、きっと、マルタを訪れたに違いないと私は思う。それは、朝早い水汲み場のそばか、泣き明かした夜明けの寝室か・・・。イエスは現れる。「おはよう、マルタ」いつもと同じ姿で、いつもの優しい声で、マルタに話しかけられる。「お前の苦しみも、悲しみも、寂しさも、みんなわかっているよ。こっちを見てごらん。私は死んだのではない。いつもお前のそばにいる」と。

復活のイエスに会って、彼女の生活は変わるだろうか。きっと、彼女は、今日も、明日も、黙々といつもと同じ日常を繰り返していくだろう。ここが、彼女の生きる場所なのだから。でも、彼女の胸の中には、イエスが生き続けている。単調でしんどい日常を、ともに生きてくださるイエスが・・・。★★★

★風の吹くまま *** 苦しみの中で***

★風の吹くまま
*** 苦しみの中で***

うつがひどくて、苦しい毎日が続いていた頃のことです。

ある夕方、私は、「死にたい、死にたい」という声を聞きながら、必死に耐えて、台所に立って洗い物をしていました。その時、私は見たのです。聴いたのです。一瞬の出来事でした。私を支えてくださるイエス様の姿と「大丈夫だから」という声を。

頭がおかしくなったと思われませんか？

イエス様は、力強い栄光に満ちた姿ではなく、十字架から降ろされたばかりの血だらけの姿でした。手足は枯れ枝のように細く、苦しそうでした。でも、私の背中を支える手は温かく、その声は、核心に満ちていました。こんなにご自分もおつらいのに、私を支えてくださっていることに、私は驚き、言葉もありませんでした。しかも、イエス様は、聖書の中で、私が歩けない時は、私を背負って歩いてくださると約束してくださっているのです。あの、鞭打ちの刑で傷ついた背中に……。

「人」という時は、人と人が支えた合っている姿を描いたものだというけれど、私は、人が、イエス様に支えられている姿をかたどっているのだと、私はその時思いました。

血だらけの土にまみれた顔で、私を見つめてくださっているイエス様に支えられ、今日も私は生きています。「うつ波」に翻弄されながらも暖かい家族の理解の中「治る」という確信を持って……。★★★

★風の吹くまま ***こんちきしょうの神様***

★風の吹くまま ***こんちきしょうの神様***

私は先日、教会でこんな聖書の言葉を勉強した。

「いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい」 (ヤコブの手紙1章2節)

ここでいう「試練」とは、外から来る苦しみや悲しみ。いわゆる、この世的なマイナスを指すのだという。

全く何て言葉だろう！この言葉をそのまま素直に受け取れる人がいたとしても、私は、そんな人とはとても友達になんかなれないだろう。キリスト教というのは、なんて奇妙な宗教なんだろう。

以前、90歳になられる教会の信徒の方から、こんな話を聞いた。その方は、広島原爆でお子さんを亡くされている。それ以来、神様に「こんちきしょう！あんない子を奪って！」と思いつけているとおっしゃるのだ。普段、とても信仰的な言葉を口にされ、明るく私たちに接して下さるこの方の、激しい言葉に私は驚いた。「こんちきしょうと今でも思いつけてるんよ」

その方は言われた「神のなさることはすべて正しいというけれど、私はそうは思わない。あんない子を奪うなって、正しいことだとはどうしても思えない。だけど、私は「こんちきしょう」と思いつけて、神様から離れられんよ。神様のなさることがすべて正しいんじゃない。神様は、すべてのことを『益』とされるんよ」

子供を原爆で奪われるという苦しみは、私などには到底わかることができない。どんなにか苦しく辛いことだったろう。その思いを、この方は「こんちきしょう、なぜなんですか」と50年以上経った今でも、神様にぶつけていらっしやる。そのことが、神様と自分とを結びつけてきたのだと言われるのだ。

その壮絶な体験には、足元にも及ばないが、私自身のうつ病も「なぜなんですか。なぜ治してくださらないのですか」と神様にぶつけ続けることで、神様と私を結びつける絆になっているのかも知れないと、ふと思う。この病気がなかったら、私は、今の牧師先生に辛い思いをぶつけて、より深く話し合える貴重な関係を作ることではできなかったろうし、同じ病気に、あるいは、内容は違っても、苦しみを追う人たちとたくさん出会い、お互いに少しでも苦しみをわかり合おうとすることもなかっただろう。そして、冒頭にあげた聖書の言葉の意味を考へることもなかったかもしれない。

わたしには、試練を「この上ない喜び」と思うことは、今はとてもできない。いや、きっと、一生無理だろう。病気なんか、誰がなりたいものか！

だが、試練がすべてマイナスではなく、よく見ると、その中にプラスの面があることを発見することなら、今もほんの少しできる気がする。

病気になったことを、あるいは、いろんなマイナスの体験を「こんちきしょう」と素直に神様にぶつけていこう。わかった風に「神様のなさることはすべて正しい」などとは、軽々しくいうまい。最近、強くそう思う。今までの私は、いい子ぶってきた気がする。神様の前で、いい子ぶっても、すべてはお見通しなのならば、泣きもしよう、叫びもしよう。それでも神様は、私を生かして下さるのだから。★★★

★風の吹くまま ***におい***

★風の吹くまま ***におい***

「イエスが当時そのままの姿で、今の我々の前に現れたら、現代日本に生きている我々のほとんど全員が『臭い!』と感じるだろうなと思いました。」

東京の新宿で「ホームレス」と呼ばれる人たちの支援活動をしている弟から、そんなメールが届いた。最近、ちょっとしたきっかけで、遠藤周作の作品をいくつか読むうちに、そう思ったのだという。

イエス様のおい。私たちは考えたことがあるだろうか。着替えも持たず、旅をされたイエス様一行は、まさに「ホームレスの集団」のようであったに違いない。冒頭の弟の言葉は、彼の活動に裏打ちされた真実だなど、私は感じた。彼の言葉は続く「荒れ野を流浪し、一番貧しく、差別された人々と共にあった人というのは、誰よりもみすぼらしく、誰よりも臭かったはずだ」私は、一度だけ、「ホームレス」と呼ばれる人とエレベーターに乗り合わせた時の、なんとも言えない、すえた、耐え難いにおいを思い出していた。

宗教画に描かれているイエス像は、美しい。だが、実際のイエス様は、旅から旅へと、汗と誇りにまみれて歩かれ、人々に見捨てられた病人の世話をしたりもされた。臭かったのに違いない。イエス様を取り囲む群衆たちもまた、貧しい人々で、十分な着替えなど持っていない、臭かったに違いない。

真っ先に、イエス様の誕生を知らされた羊飼いや、荒野で清潔な服をまとっていたとは思えないし、イエス様がお生まれなかった馬小屋も、家畜と旅人の臭いで、耐え難く臭かったにちがいない。

イエス様は、生涯、苦しく、貧しい人々のそばに寄り添われた。その人たちも、きっと臭かったに違いない。

今、目の前に、弟が言うように、そのままのイエス様が、汗とほこりにまみれて現れた時、私たちはどうするだろうか。

その方がイエス様かどうかは、証明する物などないのだ。ただ、心の目で見、見えない物を信じて、感じるしかないのだ。信じるしかないのだ。その時、私は、愛を語る臭いにおいを放つ男を、受け入れることができるだろうか。駆け寄って、感謝を込めて、抱きしめることができるだろうか。その臭さに目を背け、「そんなはずはない」と否定して、無視しないだろうか。

イエス様は、私達のうちにおられる。それと同時に、人々から忌み嫌われる「臭い」人々の中におられるのではないだろうか。そういう人々が、最もイエス様の愛を必要としているからだ。そのことを忘れてはならないと、私は、弟の言葉から思った。聖書とこの、書物の中だけで、イエス様を理解したつもりになってはいけないのではないかと自分に問うた。

かつて、高齢者のサービスセンターで、ボランティアをしている時、くさい臭いのする方がおられた。私は、その人のそばに「我慢して」座っていた。時には、何気なく、そばを離れるようにしていた。そんなことを、苦しく思い出す。★★★

★風の吹くまま ***ふりかえれば***

★風の吹くまま ***ふりかえれば***

「重症にきわめて近い、中程度のうつ病です」

そう、病院で告げられてから、もう4年ぐらい（2001年当時）たつのかな……。あの日のことは忘れられない。

帰ってから、すぐに教会へ自転車をとばして、牧師先生にそのことを告げた。「よく、病院へ行きましたね」そう言ってもらったっけ。

その日まで、自分がどうして、こんなに辛いのか、苦しかった。なぜ、神様は黙って私を苦しめるのだろうと思った。信仰が足りないのか？と相談したこともあった。ちょっと前までの元気な私は、どこへいったのか。あんなに元気に、飛び回っていたのに。

「病気だと聞いて、どう思いましたか」と牧師先生に尋ねられ「病気なら、治るんだと思いました」と答えたことを覚えている。だけど、それから、何回も「もう、治らないんじゃないか」と苦しんだだろう。私自身が悪いせいじゃないかと疑っただろうか。

今も、まだ、私は病気だけど、振り返ってみると、あの日から残っているのは、つらい記憶よりも、心からの感謝や喜びの列だ。つらいことがある時に、誰かを通して神様が私を癒してくださった。つらい自分があるからこそ、何か出来た時の喜びは、格別だった。

病気なんか、なりたくなかった。

でも病気にならなかつたら見えなかったことがいっぱいあると思うと、やっぱり感謝の気持ちになる。順調にいろんなことを続けていたら、私は、鼻持ちならない偽善者になっていた気がする。神様は、必要だから、私を病気にされたのだ。そして、たくさんのことを教えてくださった。たくさんの友も与えてくださった。

こんなことを書けるのも、今、薬が効いてくれて、順調だからだ。調子の悪い時には、感謝なんてしていられない。早く何とかしてくれと叫びたくなる。自分が大嫌いになる。

そんな、こんなを繰り返して、月日が流れていく。

私は、いつ、治るのか、わからない。たくさんの薬とさよならできる日は、いつなのだろう。ただわかることは、今は、まだ、神様が「病気の私」を必要とされていることだけだ。迷惑なはなしだけど、仕方ない。「何とかしてくださいよ」と神様をお願いしながら、つらいときには、素直に泣きながら、病気と友に歩いていくしかない。

だけど、せっかくだから、この道で見たことを、しっかり覚えておこう。振り返ると、感謝と喜びの列ができているのが見えるから、これからだってきっと……。そう信じて。★★★

★風の吹くまま ***私の中の闇***

★風の吹くまま ***私の中の闇***

私はとても鈍感な人間で、自分の心の中に「闇」の部分があることに気づいたのは、つい数年前のことだった。それまでは、自分のことを結構「いい人間」だとおもっていたのだから、おめでたいとしか言いようがない。最も、それまでも「闇」を垣間見ることはあっても、様々な理由付けをして「それは一時的なもの」と自分に言い聞かせ、目をそらしていたというのが正しいかもしれない。しかし、うつ病を患うことで私は、そこに目を向けられずにはいられなくなってしまった。

私の心の奥底にある暗い闇の流れ。ある時、それは突然に口を開け、その姿を見せる。表面がどんよりと流れているように見えるが、いったん足をすくわれるとその流れは速い。甘美な誘惑がそこへと誘う。肉体を棄てることで自由になれる。裏切ることで欲しいものが手に入る、そして、時には殺意さえも。そこに心のかげらが堕ちていく。

心がかけ墜ちるたびに私は苦しむ。なぜ、神は人間の心に闇を創りたもうたのか？なぜ、罪に向かう自由があるのか？その誘惑に耐えられず罪に堕ちていく人間のなんと多いことか！私とその一人にならないという保証はどこにあるというのか？

ただ、私は信じるしかない。この苦しみは無意味ではないことを。いつか、闇に流れていった私の心の破片にも、光が当たる日が来ることを。結局は、神を信じるしかないのだ。神を信じて生きていくと決めた私だから。

弱い心は、あまりに重い闇に悲鳴を上げる。その悲鳴さえも、私は神に向けるのだ。

世界の中で私はあまりに小さい。歴史の中ではもっと小さい塵に過ぎない。だけど、神のみ前で、私は名を呼ばれ、この髪の毛の数さえも知られている。この苦しみを、神が知らぬはずはないのだ。知っていながら沈黙する神に、私はまた悲鳴を上げる。この声は届いているのか？その疑問の全て神に投げつけるのだ。

私は立派な信仰者ではない。だけど、神より他に頼むものを知らない。それは私が選んだのではなく、私の人生を振り返れば、産まれる前から、そこに神の御手による布石がある。神が私に信仰を与え、私を掬い上げようとされているのだ。だが、この救いに至る道は先が見えず、残酷な試練に満ちているようにしか、今の私には見えない。

それでも私は歩む。歩むことができなくなっても、神は私を背負い歩もうとなさる。「もう放っておいてください！もう終わりにしたいのです！」と訴えても、神は私を見棄ててはくれない。

棄てないこと。それが愛ならば、神の愛は無限。暗い闇を抱きながら、そんな不完全な私を絶対に裏切らない唯一の存在としての神を、愚かと呼ばれるほどに信じて、生きることを許されている。ただ、御心のままになさってください。祈る言葉さえ失う私だけだ・・・。★★★

★風の吹くまま ***クリスマス・エッセイ***

★風の吹くまま ***クリスマス・エッセイ***

「信頼」

クリスマス。それは、イエス様の誕生を祝う日です。イエス様は「神の子」と言われますが、「三位一体」と言って、私は牧師や神学者じゃないので、うまく説明できませんが、実は、神様そのものなのだそうです。

神様はご自身が、赤ん坊という、置き去りにすればすぐに死んでしまうような、人間の助けがなければ生きていけないようなお姿で、私たち人間の中に身を置かれた日。それがクリスマスなのだと私は思っています。

なんという信頼でしょう！もし、マリアの夫ヨセフが、これは自分の子ではないと赤ん坊を地面に叩きつけたとしたら、あっという間に消えてしまうような儂い命。そんなお姿を、神様は人間に託されたのです。

私たちは、自分が神様を信仰しているかどうかを、しばしば問題にします。でも、そのずっと以前に、神様からのこんな大きな信頼が、私たち人間に向けられていたのです。

私たちは、神様のこの絶大な信頼に応えているのでしょうか。少なくとも私は、裏切り続けているのが現実です。それなのに、神様はなお、私を生かして置いてくださる。そればかりか、何度でも助けてくださる。何度でも赦してくださる。こんな大きな愛は、他にないと思います。

クリスマスは、神様から、私たちに向けられた信頼のメッセージを改めて受け取る日だと、私は思っています。

★★★